
魔法少女リリカルなのはSword

遠坂 士郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSword

【Nコード】

N5019X

【作者名】

遠坂 士郎

【あらすじ】

これは衛宮士郎がオリキャラを連れてリリカルワールドへ行き、そこで幸せについて考えるお話です。

プロローグ（前書き）

この話にはクロスオーバー・オリキャラ・独自解釈・ご都合主義・処女作・主人公最強・ハーレム？などの要素がございますご注意ください。

逆にアンチ管理局・オリ主・転生・憑依等は含みません。

なお、作者は様々なリリなの×Fate系小説に影響されているため皆さんがご存知、もしくは執筆された設定、場面等があるかも知れません。

ご了承ください。

プロローグ

「ふぁー……おはよー、お兄ちゃん……。」

「おはよう優菜。もう少しで朝食ができるから今のうちに顔を洗って来るといい。」

朝食を作りながら、まだ眠そうな妹・衛宮優菜に挨拶を返す私こと衛宮士郎。

「忘れ物は無いか？弁当はいれたな。」

「うん！」

と数十分前とは打って変わって元気に返事をする優菜。

「それでは出るとしようか。そろそろ行かねばバスの時間に遅れてしまうからな。」

「はーい！」

この二人は私立聖祥大附属小学校に通う小学三年生と一年生だ。

「おはよう士郎君、優菜ちゃん。」

「今から学校かい？」

同じアパートに住む老夫婦だ。今から仲良く日課の散歩からへ行くのだろう。二人とも動きやすそうなジャージを着ている。

「「おはようございます（！）」」

そういつて駆けていく二人を見届けながら、老夫婦は

「二人とも本当に元気ねえ。」

「全くだ。優菜ちゃんもここに来たばかりの時はふさぎ込んでいたけど、今じゃすっかり明るくなって……やっぱり学校に行かせたのは正解だったなあ。」

「そうですねえ。」

そんなことを話しながら二人はゆっくりとその歩を進めた。

さて、今度はところ変わって私立聖祥大附属小学校に向かうバスの中、

「あ、士郎くん！優菜ちゃん！」

「おはよう、二人とも。」

「相変わらず仲が良いわねー」

挨拶（？）してきたのは士郎のクラスメイトである高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスである。

「おはよう。三人とも今日も元気そうで何よりだ。」

「おはよう！なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん！」

衛宮兄妹も挨拶を返す。

「そういえば士郎、宿題だった算数のプリントやった？」

「えっ…：そんなのあったっけ？」

「なのは…：もしかして忘れたのか？」

「なのはちゃんってたまにそんなドジするよねー」

「大丈夫？学校着いたら見せてあげようか？」

そんな雑談をしているうちにバスは走り出す。
目的地に向けて加速する。

こうしていつもと同じ一日が始まった。

プロローグ（後書き）

初めまして。

遠坂 士郎です。

今までずっと読者専門だったのですが、最近こちらのサイトに登録したのをきっかけに自分も書いてみようと思い立ち、今に至ります。

先ずは日常と思わせぶりの事を書いてみました。

次回はキャラ設定などを公開する予定ですが、二人の詳しい過去はまた本編で書く予定なので少々お待ち下さい。

また、思いつきで始めた小説なので不定期更新だったり、煮詰まって書けなくなったり、過去に書いたことと矛盾する描写があるかも知れませんが、それをご理解の上で作者お付き合い下さい。

解説や改善した方が良い点があればどんどん感想の方に書いてください。

これからよろしく願います。

キャラ設定（前書き）

前回書いた通りキャラ設定などを載せます。

キャラ設定

衛宮 士郎 (9)

hollowのように原作のどのルートでも存在しないとある平行世界に存在する衛宮士郎の姿の一つ。

世界との契約は結んでいないため、その実力は英霊には及ばないが、ただの人間の戦闘者としてはかなりのもの。しかし、リリカルワールドに来る際に、年齢が七歳に退行したことによって、筋力なども相応に落ちてしまった。また、年齢退行に伴いアーチャーと同じ外見だったのが元に戻り、現在はまさしく衛宮士郎九歳当時の姿。

また、世界との契約を結んでいないのでその理想はまだ摩耗しきることなく残っていたが、優菜を育てる事になって人を幸せにする為には自らも幸せを知らなくてはならないと考えるようになった。

その結果、今有る日常のなかで、自分の周りの人間が笑顔である事が自らの幸福に繋がると考えた。二年前のとある事件をきっかけに優菜を幸せにする事を誓う。優菜からはお兄ちゃんと呼ばれてはいるが、その実年齢(29)や主夫っぷりも相まって、実質的には兄よりも父親に近い。

基本的に口調は弓兵と同じだが、学校などでは年相応の話し方をするように心掛けている。

――
――
――

衛宮（漣標） 優菜 （7）

二年前の事件の際に母親である漣標志保を亡くして以来、士郎に育てられている。魔術師の家系に生まれ、その魔力量は遠坂凜や高町なのは程では無いが、かなりのもの。

しかし、兄（士郎ではない）がおり、彼が家を継ぐはずだった。魔術については士郎から教わった最低限の知識と魔術回路の運用法ぐらしいしか知らないため、実際に魔術を使う事はできず、せいぜい一部の魔術礼装を使用することぐらい。

リリカルワールドに来たばかりの頃は母親の漣標 志保が死んだショックから立ち直り切れていなかったが、士郎や老夫婦等の努力の甲斐があり、今ではその明るく天真爛漫な性格からご近所の人気者となっている。

しかし、まだ完全に心の傷が癒えた訳ではなく、家族を傷付ける者には過剰に反応する。

士郎と平和に暮らしていく事ができればそれでいいと考えているが、同時に自分がいては士郎が自分の理想を追うことが出来ないとも思っている。

漣標 志保 （享年32）

元々魔術とは無関係の一般人だったが、結婚してから夫が魔術師であることを知る。その後子供を二人作る。

優菜が魔術実験の材料として使われる事を知り、優菜を連れて海外に逃亡する。そこで衛宮士郎と出会い、彼を追って来た封印指定の

魔術師の攻撃で命を落とす。その際に、優菜を士郎に託す。

自分は家族を誰も幸せに出来なかったのではないかと、家を出てからもずっと悩んでいた。

桂夫妻 （共に77）

士郎達の生活するアパートの管理人。

士郎達の世話を焼く過程で、かなりのお金を使っているはずだが平然としていたり、私立聖祥大附属小学校の理事長と知り合いだったりと、普通に考えればかなりの大物のだが、何故かこじんまりとしたアパート（築40年）を格安で経営しながら生活している。本人達曰く、老後の楽しみ。実はこのアパート、貧乏学生には人気の物件。

この二人の存在は二番目に不思議な謎である。

当然一番は、リリなの原作のお母さんズの異常な若さの謎。

キャラ設定（後書き）

とまあ今（2011.10.11現在）はこんな感じですが、必要に応じて書き足していくつもりです。

澤標 志保を更新しました。（2011.10.12）

勝手ながら、衛宮 士郎等に関するいくつかの事柄を変更させていただきます。（2011.10.13）

桂夫妻を追記しました。（2011.10.24）

第1話 終わりの慟哭（前書き）

とりあえず以前言っていた過去編です。

どうぞ。

第1話 終わりの慟哭

ここはある国のある街にある小さな貸家。

私はこの付近で紛争が勃発したとの情報を元により詳細な情報を知るために比較的安価な貸家の一つ借りて、そこを拠点にしばらくここに滞在している。

しかし、封印指定を受けているので余り長居をすべきではないし、必要な情報もそろいつつあるので、後数日中にはこの街を出るつもりだ。

現在の時刻はちょうど十二時とどの家庭でも昼食時であろう時間帯だ。

本来、私の昼食はもっと遅くに食べるのだが、今日ばかりは私も例外ではない。私は出来た料理を、テーブルに並べていた。とそこへ、

ピンポン

と家のチャイムがなった。きっと今日の客人が来たのだろう。そう思ってドアを開けると、

「お兄ちゃん」

私の腰に少女が飛び込んで来た。

「こら優菜。おとなしくしなさい。士郎さん、お邪魔します。」

ドアの前には、今度は私より少し年上であろう女性が立っていた。

「二人とも良く来てくれた。さあ、上がると良い。ちょうど昼食の

用意が出来たところだ。それと優菜、誕生日おめでとう。これは私からのプレゼントだ。」

そういうと私は二人の客人——滯標志保と滯標優菜を家に招き入れて、優菜に小さな箱を渡した。

二人はこの家の近所に住んでいる日本人の母子だ。彼女達とは私がここに越してきて街の地形等を把握するために歩き回っていると、優菜が車に轢かれそうになっていた所を発見し、助けた時に知り合った。家が近所だというのもその時お礼だと言って強引に彼女達の家に来て行かれて、夕飯をご馳走になって知った。

志保は魔術師の家系に嫁いだ一般人の女性で、生れつき魔力量の多かった優菜が魔術実験の材料として使われそうになったため、優菜を連れてここまで逃げて来たらしい。

実際、優菜の魔力量はかなりのものだ。しかし、余り魔力の感知が得意ではない私ですら特に意識せずとも魔力を感じるのだから、このままでは他の魔術師達に狙われるのも時間の問題だ。

そんな事を考えていた矢先に今日が優菜の誕生日だと聞いて、昼食に招待すると共に以前遠坂から貰った魔力殺しのアミュレットを投影してプレゼントすることにした。

「ありがとうお兄ちゃん。中を見てもいい？」

「ああ。開けてみるといい。」

「うん！」

優菜はすぐさま包装を破り捨てて箱を開けた。

「わーきれー！ありがとうございます、お兄ちゃん！」

「ああ。喜んで貰えたようで何よりだ。」

優菜はひとしきりアミューレットを眺めるとそれを私に差し出して

「お兄ちゃん、着けて！」

と言ってきた。

「わかった。」

着けてみるとサイズもピッタリのようで安心した。

「よかったわね優菜。」

「うん！」

「さて、それではそろそろ昼食としよう。せっかくの料理が冷めてしまう。」

そうして私達は食卓に着いた。

「お兄ちゃん、今日は一緒に遊んでくれる？」

「ああ。」

「よろしいんですか？士郎さんもお忙しいでしょう？」

「もちろんだ。今日はそのために君達を家に招待したのだから。」

「そうですか？……それならお願いしちゃうかしら。」

「了解した。それでは優菜、何をしようか。」

そして、私と優菜は外に出てしばらく遊んでいた。志保はその間お茶を飲みながら、本を読んでいた。

「む、あれは……………」

ふと空を見上げると、爆撃機が飛んでいるのが見えた。だが、型からしてこの辺りを攻撃して来る事はないだろう。そう思って少し優菜と街を歩いていると、

ドゴン！ドゴン！

先程の爆撃機がいきなり爆撃を始めた。何故だ？ここにはあの爆撃機を所有している陣営の支持者も多数存在していてこの辺りを攻撃してもなんのメリットも無いはずだが…………

「ねえお兄ちゃん…………。お家…………大丈夫かな…………？」

優菜のその言葉を聞いて、私は急に嫌な予感がした。

――

――

――

いくつもの倒壊した家屋を横目に、急いで帰ってみると案の定、瓦礫の山と化した私の家と――血に塗れ伏した潯標志保の姿があっ

た。

「いやあああああああ！！！！お母さああああん！！！！！！」

優菜が泣き叫ぶ声が響き渡る。

私達はすぐさま志保に駆け寄った。

「ゆ……………な……………」

志保の口が動く。

「志保！しっかりしろ！今手当する！」

私はすぐにアヴァロンを取り出し、志保に持たせる。そして瓦礫の中から包帯を探しだして志保に巻く。

しかし出血が酷く、セイバーのいないこの状況ではアヴァロンもあり意味がない。このままでは彼女は……………

「しろ……………さん……………お願い……………が」

「何だ。」

「ゆう……………な……………を……………ど……………うか……………しあわ……………せ……………に……………」

「……………ああ、わかった。彼女は私が責任を持って幸せにすることを誓おう。」

「お母さん！お母さん！」

未だ母を呼ぶ優菜。

「ゆ……………う……………な……………ごめん……………ね……………ゆう……………」

そして彼女は事切れた。

「お母さん……………嘘……………ダメ……………いや……………いやあああああ
ああああああ！！」

再び彼女の絶叫が響く。

私はただそこに立ち尽くすことしか出来なかった。

第1話 終わりの慟哭（後書き）

さて……………ここからどうしようか……………

とりあえず今回はここまでです。

今回出て来た二人目のオリキャラ、濤標志保はキャラ設定に載せて置きます。

今回はテンプレ展開に必須で作者が一番好きなあの人が出てきます。

ちなみに、もしかすると次回は現在の状況から変えるためにグダグダ感の溢れる話になってしまうかも知れません。
そうなってしまっても、どうかご容赦下さい。

ではでは

続・第一話 始まりの一閃（前書き）

— 1話で書ききれなかった分です。

……あれ？こっちのが文字数多い？

続・第一話 始まりの一閃

しばらく家の瓦礫前で立ち尽くしていると、どこからか懐かしい声が聞こえて来た。

「士郎!!」

「!この声は…」

振り向くと、そこには数年前にロンドンで別れて以来、一度も会うことのなかった戦友——遠坂凜が、かなりの量の荷物を持って、こちらに走って来ていた。

「遠坂!どうしたのだね、こんな所で？」

「ぜえ……はあ……ふう」

息を整えると、

「どうしたのだね? じゃないわよ!! 置き手紙に『ありがとう』とだけ書いていきなりいなくなったと思ったら次に生存が確認出来た時には封印指定されてたり犯罪者になってたりってあんた一体どういうつもりよ! それでやっと居場所がわかって助けに来てやったら今度は封印指定の執行者にギアスをかけられたパイロットに爆撃されているし、あんたはあいつみたいになってるし! どうせあんたの事だからこのまま無料奉仕の救助活動でもしてどっか行くつもりだったんでしょ!?! ちょっとは探しているこっちの身にもなりなさいよね!」

一気に言い切った。

なるほど、あの爆撃機は封印指定の執行者の仕業だったのか。確かに本来なら爆撃が起きた時間に私は自宅で食事を摂っているはずだが、今日は優菜達に合わせていつもより早く食事を終えてしまった。また、毒を盛られる可能性を考慮して普段は全くを外食をしないのも今回ばかりは仇となってしまう様だ。

ところで助けに来たというのはどういう事だろう？

だが、そのことを尋ねる前に

「全く……で？そっちで泣いてる娘は？」

と尋ねられた。

私は濤標母子との関係と先程起こった事を話した。

「ふーん……なるほどねー。それで、子供を託された士郎はこれから一体どうするつもりなのかしら？」

「無論、誓いは果たす。とは言え先程君が言った様に、私は表では犯罪者、裏では封印指定の魔術師だ。何より私は子育てなどやったことはない。正直な所を言えば、彼女をまともに育てられる自信がない。」

「……………そう。それなら私が少し助けてあげる。」

「助ける？さっきも言っていたがそれは一体どういう事だ？」

「どうもこうもそのままの意味よ。とりあえず今はあの子を何とかして会話出来るようにさせなきゃね。」

そういうと遠坂はおもむろに優菜の方に歩いて行った。

「言つとくけど今からあの子に言うことを聞いたら殴っ血killからね。」

その声はまさしく、あかいあくまの物だった。

遠坂はへたり込んでいる優菜の隣にしゃがむと、その肩を抱きながら彼女に何かを耳打ちした。すると、ずっと嗚咽をあげていた優菜がゆっくりと顔を上げた。それから少しの間二人きりで何かを話していたが、音声遮断の魔術を使っているらしく、その話しが私の元へ聞こえて来る事は無かった。

そして、二人で立ち上がると、手を繋いでこちらに歩いてきた。

「ほう、これはすごいな。良ければ後学のためになんと行ったのか教えてくれないか？」

「な……ダメよダメ！乙女の秘密何だから！」

む……そう言われると余計気になるが、ここは深く突っ込まない方が身のためなのは冬木で学習済みだ。

「そ、そんなことよりさっき言った通り、あんたは犯罪者だったり封印指定だったりと色々やりすぎて、この世界に居場所を無くしてしまった。まあ自業自得ではあるんだけど、これはあんたが一番良くわかってるわね。」

「ああ。」

その事は今回、痛いくらいハッキリと再認識させられた。

「なら、あなたはもししたら居場所を作る事が出来るかしら？」

？…………おかしな事を言う。

その居場所がこの世界の何処にも無いときつき話したばかりなのに、何故そんなことを聞くのだろうか？

「…………どうやらわからないようね。じゃあ教えてあげる。」

と言って遠坂は持っていた荷物のうち、一番小さな鞆から取り出したものは――

「魔術師の基本、無いなら別の場所から持って来るよ。」

――宝石剣ゼルレツチ

「とどのつまり、この世界に居場所が無いんなら、別の世界で作れば良いって事よ。とは言っても、ここじゃ人目が有りすぎるし他の準備も必要だから、このあたりに何処か人気の無いところはない？そこで今晩夜中の2時に始めるから遅れずに来なさい。」

そう言うと、今度は別の鞆からペンと便箋を取り出して、

「後、これ。最期になるんだから世話になった人達に手紙でも書いて置きなさい。桜とか藤村先生とか、心配してる人、いっぱいいたわよ。私が届けてあげるから、ちゃんと書きなさいよ。」

「ああ、わかった。何から何まですまないな、残念ながら恩返しをすることは叶いそうに無いが、ありがとう。それと、人気の無い所ならここから11km程東へ行けば廃工場があるからそこを使うといい。」

「…………別に良いわよ。今回の事は大師父の宝石剣の投影品のお礼と私が作った宝石剣の実験みたいな物だし。」

そういつて俯きながら顔を背ける遠坂。

大師父の宝石剣の投影品とは、私が遠坂と共にロンドンの時計塔に居た時に、気まぐれで私達の元を訪ねてきた死徒二十七祖が一人（？）にして第二魔法の使い手であるキシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ氏がこれまた気まぐれで見せてくれた宝石剣を投影した所、完成度二割にも満たないような粗悪品が出来上がったのだ。そんなものでも、研究すれば今後はかなりの進歩が望めるらしいので、プレゼントしたのだ。（本物は本当に見せるだけだった）

「ほう、完成したのか？」

「いいえ。まだ未完成よ。詳しい事はまた後で話すけど、士郎と優菜ちゃんを平行世界に飛ばす事くらいなら出来るはずだから安心しなさい。じゃあ私は準備があるからそろそろ行くわね。1時位には来なさい。いいわね？」

それだけ言い残すと、遠坂は廃工場の方へ向かって行った。

「やれやれ、こういう所だけは変わらないな。」

と呆れて見せるものの内心は少し嬉しかったりもする。

「さて、優菜。志保を火葬しようと思うのだが、かまわないかね？ ああ、ちなみに火葬とは彼女の死体を燃やすということだ。」

酷な質問だと思う。しかし、私は敢えて聞く。

いくら遠坂のおかげで最低限、会話の出来る精神状態になったとしても、彼女はまだ5歳で、目の前で母親を亡くしているのだ。平気

なはずが無い。それでも、今これをしておかなければ彼女はいつか後悔してしまうだろう。

「……………うん。……………おねがい、お兄ちゃん……………。……………ずっとあのままじゃお母さんがかわいそうだもんね。きちんとおそうしきしてあげないと。」

どうやら彼女は私が考えていた以上に聡く優しい子らしい。

私はクシャクシャと優菜の頭を一通り撫でてやってから、地面に魔法陣を描いた。そして、瓦礫の上に転がっている志保をそっと抱き上げてそこに置くと、申し訳程度に近くに咲いていた花を摘んで持たせた。

顔に付着した泥や血を拭ってから、私は志保を囲む様に黒鍵を魔法陣に突き立てた。

「火葬式典。」

志保は灰も残らず燃え尽きた。

優菜を見ると、彼女は聖母の様に膝まずいて祈りを捧げていた。

志保の葬式が終わった後は、荷造りをした。

優菜達が住んでいた家は被害を免れたらしく無傷だったので、家にながって荷造りを始めた。とは言え、私の場合私物はリュックサック一つで事足り程度の荷物しか持っていないし、優菜もまだ幼いので必要な物は少なく、精々服を数着だ。それと保存の効く食べ物に

貴金属をいくつか拝借した。貴金属ならどのような場所でもそこそこの金額で売ることが出来る。

そして以前私と志保と優菜の三人で撮った写真を持って、荷造りは完了した。

荷造りが終わると今度は手紙を書くことにした。桜、藤ねえ、イリヤ、一成、慎二、美綴等、お世話になった人達を一人一人思い出しながら、もう二度と会えなくなる人達に手紙を書いていると、遺書でも書いている様な気分になる。

私が手紙を書いている間、優菜は部屋の隅でうずくまって座っていた。

そんな優菜を横目に見ながら、私は最後の人物に宛てた手紙を書き終えた。

手紙を書き終えるとなることがなくなり、優菜に気になっていた事を尋ねた。

「そういえば優菜、あの時遠坂は君になんと言ったのかね？」

あの時は遠坂にはぐらかされたが、実はひそかに気になっていたの

だ。

「えーつとねえ……おねがいされたの。」

「お願い？」

一体どんなお願いをしたのだろうか？

「うん。あのね、お兄ちゃん是他の人を守ってばかりで自分の事になると全然大切に出来ない大莫伽者だから私がお兄ちゃんを守ってあげてって言われたの」

そんなことを言われていたのか……。

とは言え結果として優菜が落ち着いたから良いのだが、どうにも複雑だ。

|

——

——

そして遂に約束の時間は来た。

廃工場に入ると、遠坂の足元に魔法陣が描かれて居て、その周りに彼女が持って来たらしい魔術器具とそれが入っていたのだろう開いた鞆の数々。そして小さめのトランク程の大きさの閉じている鞆が一つ置いてある。

「来たわね。士郎、優菜ちゃん。」

「ああ。」

「うん……………」

夜中ということもあり、優菜は眠そうだ。

「じゃあ説明に入るわね。まずこの宝石剣だけど、どうせ難しい事はあんたには理解出来ないだろうからかみ砕いて言うと、これは二年前から作っている未完成の試作品よ。それでも去年から同時進行で進めていた宝石剣の効果を増幅する為の魔法陣と併用することであなたたちを平行世界に飛ばす事位は可能よ。ただ一つだけ問題があるの。」

「ふむ。それは？」

「……………まだ未完成だからうまく制御が出来ないの。だから、とりあえず人間がいる世界の何処かに飛ばす事は出来るだろうけど、どんな世界に行き着くかは完全に未知数。もしかすると、人間はいるけどこの世界の人間とは別の、より過酷な環境で生き抜く事に特化した人間であなたたちは生きていけないような世界に出るかも知れないの。それでもいい？」

「無論だ。どの道私はこの世界では生きていけないのだから、これに賭けるしか生き延びる術はあるまい。優菜はどうだ？」

「ん……………私はお兄ちゃんと一緒にいるー。」

「……………だそうだ。遠坂、頼む。」

「……………わかったわ。じゃあこれは私からの餞別よ。受けとって。」

遠坂は閉じている鞆を私に手渡した。

「手紙を預かるから出してちょうだい。」

「わかった。」

懷から手紙を渡すと何故か急に胸が寂しくなった気がする。

「後、これを。」

「まだあったの？面倒臭いから一気に出しなさいよね。」

「いや、これは君に宛てた手紙だ。」

遠坂が面食らった様に動きを止めた。

「何を驚いているのだね？世話になった人達に手紙を書けと言ったのは君だろうに。」

世話になったと言うのなら誰よりも一番世話になったのは遠坂だろう。今思えばよくもまあ私のような愚か者に付き合ってくれていたものだ。

「……………そう……………そうよね……………私も我ながらよくあんたみたいなものの世話をしたものだね。」

私からの手紙を受け取ると、壊れ物を扱うようにゆっくりと手紙を胸に抱いた。

「もう……………どうしてくれんのよ……………せっかく泣かずに……………優

雅に別れようと思ってたのに…………泣いちゃったじゃない…………」

俯いた顔から滴がこぼれ落ちる。

「参ったな…………泣かせるつもりは無かったんだ。」

さて、どうしたものか…………。

と、その時ふとある言葉が頭に浮かんだ。

「大丈夫だよ、遠坂。」

それはこことは違う世界において、弓の英霊が誓った言葉。

「俺も頑張って行くから。」

そう。これもまた、誓いの言葉。

「…………うん、わかった。その言葉、絶対忘れんじやないわよ。」

「ああ、わかった。」

みるみるうちに宝石剣と魔法陣に魔力が溜まって行く。これならあと三十秒もしないうちに私達はこの世界から消えるだろう。

「お姉ちゃん、バイバイ。」

「ええ、さようなら優菜ちゃん。じゃ、士郎行くわよ。」

「言っておくがいつものうっかり（呪い）を発動させないようにな。」

」

「心配せずとも、去年から既に克服済みよ。」

「そうか。それはよかった。機械とその呪いだけが君の数少ない弱点だったからな。その調子で頑張って機械も克服してくれ。」

「そうね、気が向いたらそうするわ。」

最後にそう言って笑いあった。

「さあ。そろそろよ士郎。」

「ああ。」

その瞬間、昼の遠坂との会話を思い出した。確か宝石剣を作り始めたのは二年前だと言っていた。そしてうっかりを克服したのは――
――去年だと言った。

その思考に思い至った時、

「あれ？ 宝石剣の出力が……………」

「お、おい、待て遠さ……………」

「このままだと孔がけいさんより小さく……………え……………いそのまま行っちゃえ……………!!」

「な……………」

斬撃によってできた孔に飲み込まれながら、私は数年振りに私にとっての理不尽の象徴のようなあの口癖を口にする。

「なんでき……………」

こうして、衛宮士郎と濤標優菜は運命の地へと至る。

続・第一話 始まりの一閃（後書き）

何だこのg d g d感……orz

一応言っておくと、士郎がアーチャー口調なのに遠坂と呼んでるのは仕様です。

ということでは作者の心の人気投票ランキング総合一位、うっかりあくまの遠坂凛さんの初登場にして最後の出番でした。

ちなみに二位はアーチャーさんです。

えっ？ベストカップル？士×凛に決まってるでしょう？

いやーしかしやっぱり遠坂さんの第二魔法によるベタベタテンプレ展開になりましたねー

これでリリカルワールド突入な訳ですが、またもここからどうしようOTL

もししばらく更新されなくなっても愚かな作者をどうか見捨てないでやってくださいm（　　）m

第0話 許し・戸惑いの異世界（前書き）

投稿が大分遅れました。すみません。

実はこの前までテスト週間で部活もなく、勉強（執筆）する時間をたくさん取れたのですが、テストが終わって逆に時間が無くなってしまいました。今後も執筆に時間がかかるようになってしまいうでしょうが、どうかこれからも暖かいめで見守って頂ければ幸いです。

何とかリリカルワールドにて第0話を書き上げました。

しかしどうしてもgdgd感が無くならない。どうしたらgdる事無く書けるの？教えて巧い人。

第0話 許し・戸惑いの異世界

宝石剣の斬撃に吞まれた後、私は激しい痛みに襲われた。

何時からそれを感じていたのかはわからない。

吞まれた直後だったかもしれないし、何時間もたってからだったかもしれない。

いや、そもそもあの空間に時間という概念があるかどうかも怪しい。

ただ覚えている事といえば、

それは切られる様な

それは刺される様な

それは挟まれる様な

それは削られる様な

それは溶かされる様な

それは潰される様な

——そんな痛みだった。

その痛みを感じた瞬間、私は思わず近くに居た優菜を抱きしめた。そして、彼女の気持ちよさそうな寝顔を確認すると、私は意識を手放した。

――

夢を見ている。

夜、立派な日本家屋の縁側で、赤銅色の髪の毛の少年――衛宮士郎と、まるで疲れきった老人の样にも見える若い男――衛宮切嗣が、満月を眺めながら話していた。

「子供の頃、正義の味方に憧れていたんだ。」

そう、これは夢。

「何だよそれ。憧れたって、諦めたのかよ。」

私（空の杯）に理想（中身）が与えら（注が）れた日の記憶。

「うん。残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなこと、もっと早くに気がつけばよかった。」

衛宮切嗣と共に過ごした最期の思い出。

「そっか。なら、仕方ないな。」

思えば、衛宮士郎が本当の意味で生まれたのはこの時だったのかもしれない。

「ああ。本当に仕方ない。」

そして、私は誓いを立てる（呪いにかかる）。

「うん、しょうがないから俺が代わりになってやるよ。爺さんは大

人だから無理だけど、俺なら大丈夫だろ。」

だが、ここで私の記憶と夢が食い違う（分岐する）。

「いや。もう十分だよ、士郎。君はよくやってくれた。通った道は僕と同じだけど、君はけして折れることなくここまで来た。君がこの無垢な理想を守り、貫いてくれただけで僕は満足だ。だからもう君は君の為に、君の大事な人の為に生きて欲しい。僕もかつては多くの命を奪い、多くの人を不幸にして来た。だけど、そんな僕でも幸せな時間を過ごす事が出来たんだ。なら、君が幸せになっちゃいけない道理なんて何処にもない。士郎、どうか君も幸せになってほしい。それが、それだけが今の僕の夢だ。」

そして私は許された（救われた）。

同時に新たな誓いを立てる。

「まかせろって。爺さんの夢は俺が、ちゃんと形にしてやるから。」

私はあの時言えなかった言葉を伝えと、

「ああ、安心した。」

親父は幸せそうに微笑んだ。

目覚めると、私は夜の山の中に居た。

少し肌寒く周囲には若葉が茂っている事から、もしここが日本な

ら季節は初春だろう。まだ少し痛みは残るが、ひとまず起き上がろうとすると、バランスを崩してしまった。怪訝に思いながら体を確認すると——可愛らしい子供の体が見えた。

「なっ!.....」

という驚愕の声も、二十年程前の自分ものだ。

様々な経験から、私は大抵の事では驚かなくなつたと自負しているが、さすがにこれは予想の範囲外だった。

動転しながらも、自分に解析をかけてみると

身体年齢——七歳

魔術回路——正常稼働可能

無限の剣製——発動可能

魔術基盤の独占による使用魔術の強化を確認。

また、現在の感じている痛みは数分後には感じなくなる。

七歳!?!まさか本当に二十年も若返っているとは……

理由は間違いなくあの遠坂のうっかりに決まっている。孔が小さく等と言っていたから、体を縮めて無理矢理通したのだろう。それにこの痛みは恐らく体が縮む時の副作用見たいなものだろう。数分後には回復するらしいし、優菜も寝ているので、それまでは休んでいるとしよう。

そういえば、さっきは動揺していたので思い至らなかったが、こ

これが魔術の使えない世界である可能性もあった訳だが、これは解析が使えたし、他の魔術も恐らく使えるだろう。とは言え、あまり樂觀するのにもよくないので、ひとまず自分の着る長袖シャツとズボンとを投影する。子供になったせいで、今まで着ていた聖骸布の外套とプレートアーマーが着られなくなってしまったのだ。着られなくなったそれらを入れるための鞆も投影してしまっておく。

その時、投影した物がいつもより遥かに上手く造れている事に気づいた。そういえば、さっき自身に解析を掛けた時に魔術基盤を独占したと言っていた。魔術基盤の独占ということは、この世界には魔術師はいないと思って間違いないだろう。

これで懸念事項が一つ減ったが、逆に人間がいなくてという可能性もある。まあそれも山を下りてみればわかる事だ。

また、痛みが引いたら、まずは歩く練習をしなければならない。体が急に縮んだのでうまく体を動かせず、さっきバランスを崩したのもこの為だ。

それに、七歳の体ではまともに武器を扱えないので、それもどうにかしなければならない。体はこれから時間をかけて鍛えていくとして、当分は使用する武器を全て小型化し尚且つ軽量化して投影しなければならないだろう。武器を本来の形から外して投影するのはより集中力や魔力を消費しなければならないし、宝具や魔剣、聖剣の類はその神秘性を損なってしまいが、使えないよりはずっとましだ。どの程度軽量化すべきか一度一通り試すべきだろう。

とは言え、今は痛みが引くまで休もう。そう考えた私は、優菜の頭を撫でながらこれからすべき事を頭の中で整理していった。

痛みが引いて、歩行練習もなんとか走られるまでになったところで、私は遠坂がくれた餞別の中身をまだ確認していなかった事に気づいた。

優菜を起こさないよう気を配りながらゆっくりと鞆を開けると、そこには大小様々な宝石と、古びた一冊の本があった。

宝石の方は、魔力が入っている物といない物で別けられている。

本の方は、私がまだ遠坂と共にロンドンにいたころ、彼女が私に魔術を教える為に使っていた物だ。何のつもりで入れたのかはわからんが、これも彼女なりに必要になると思って入れてくれたのだろう。そう思って私は中身を全て鞆に戻した。

下山することにした私は、優菜を起こした。

子供の体力なので、鞆を持ちながら二つ年下とは言え人を背負って山道を歩くのは流石に無理がある。

ただ、優菜を起こした時に「きみだあれ？」と聞かれてからの精神的ダメージからの回復と優菜に対する説明に時間を使いすぎてしまったため、今では日の出が見え始めている。

この山がどれほどの大きさかわからないが、なんとか再び日が暮れる迄に麓に到着したいと思っていたら、以外にもまだ日が昇り切らない内に下山して日本の住宅街の様な場所に到着することが出来た。住宅があるからには人間はいるのだろうし、町の様子から私達が居た世界と同程度の文明や科学力はあるらしい事が予想出来る。また、

道も汚い訳でもなければ、不自然に綺麗でもないので、特に治安が悪い訳でもなさそうだ。

「お家だ！」

と今にも走り出しそうな優菜を諫める。

「待て、優菜。町があるからといって、そこが安全であるという保障は無い。例えば、異常に排他的な文化を持っていたり、この時間ならまだチンピラが徘徊している可能性もある。ここは治安も良さそうだから流石に住宅街にまでその類がいるとは思わんが、用心に越した事はない。それに、この世界で使われている言語や通貨等、私達はこの世界について何も知らないのだ。他にも調べなくてはならない事柄は多い。多少時間をかけてでも、先ずはこの世界について学ぶべきだ。この文明レベルなら図書館があるだろうから、先ずはそこを探すことにしよう。」

「うん。わかった。」

一晩眠って大分落ち着いたようだが、まだ優菜の表情は固い。

この娘はまだ母親を失ったばかりなのだから私がしっかりして、危険が無い様にしてやらねば。

私は決意を新たに、町の探索を開始した。

――

――

――

数分後、私達は町の案内板の前にいた。

遠坂の事だから一体どんな奇天烈な世界に飛ばしてくれたのだろうと身構えていたら、なんと私の理解できる言語を扱う世界だった。

というか、ぶっちゃけ日本だった。

流石にこれは私としても予想外というか、拍子抜けだ。

いきなり私をこんな体にくれる様なうっかりをかましてくれたので、飛ばしてくれた世界もきっと実に私の常識から掛け離れた場所なのだろうと思っていたら、案内板には私の人生の半分以上の年月を慣れ親しんだ日本語が使われていた。書かれている地名は知らないものだが、もしここが私の知る通りの日本ならば、懸念事項は一気に少なくなる。

案内板には、風芽丘図書館という図書館の場所が書いてあったので先ずはそこに向かう事にした。

――
――
――

途中、朝食を摂るべきだと考えていると、前から老夫婦が歩いて来た。

「あら（やあ）、おはよう。」

「おはようございます。」

とりあえず挨拶を返す。

「こんな時間にどうしたんだい？」

おばあさんに尋ねられる。

「図書館に行くつもりなんです。ちょっと調べたいことがあるので。」

「図書館？ 風芽丘図書館ならまだ開いてないはずだがなあ。」

とおじいさんが教えてくれた。

「そうなんですか？ じゃあ、図書館の開館時間とこの辺りで食事が出来る場所はありませんか？ 朝食を摂って時間を潰そうと思いますので。」

私がそう尋ねた瞬間、老夫婦の目が光った気がしたと思ったら、急に寒気がした。

「なら、私達と一緒にいかが？」

「今ちようど日課の散歩から帰る途中でな、わしらもこれから朝飯を食うところなんじゃよ。」

「おばあちゃんのお味噌汁はとっても美味しいんだから。」

「そういえばこの前漬けたそろそろ漬物がそろそろ良い具合になるとるはずじゃ。」

「おじいさん、今の若い子達はそんなもの食べませんよ。」

そんな話をしながら強引に連れて行かれてしまった。

途中で遠慮しようと思ったら、

「少しで良いからこの古い先短く寂しい古いぼれ達の話し相手になつておくれ。」

等と言われたら断れなくなってしまうた。

老夫婦が大家をやっているというアパートに連れられて、玄米、魚味噌汁、漬物という純和風の朝食を頂いた。特に優菜は、玄米や漬物を見たことが無いらしく、不思議そうに食べていた。それを微笑ましく思いながら、自らも久しぶりの和食を楽しんでいると、

「ところで貴方達、この辺りの子じゃないでしょう？何処から来たの？」

それまで料理の説明をしていた老婦人が質問してきた。

「あー、その……………」

と口ごもっていると、

「そういえばさっきは気にしなかったが、お母さんはいるのか？この時間に君達の様な子供二人だけという事はないじゃろ？」

今聞くくらいならさっき気づいてほしかった。

この非常に答えづらい質問に、私は悩んでいた。

きつと、親や家が無いことを話せばこの老夫婦は私達を助けてくれるだろう。彼等と出会って数時間しかたっていないが、彼等の人の良さは身に染みる程わかったつもりだ。この老夫婦は今まであった好々爺とした追いはぎの類とは違うだろう。だが、だからといってそう簡単に彼等に頼っていいだろうか？ここは彼等の管理するアパ

トとの事だから、私達の事情の断片を話せば見返りがなくとも部屋の一つくらい貸してくれるに違いない。しかし、そこまでしてもらってはこれのお人よしの老夫婦に恩を返しきれなくなってしまう。

どうしたものかと考えていると、優菜が志保の形見として持ってきた貴金属の一つを差し出してきた。

それだけで、私はこの娘の言わんとする事がわかった。この娘が私の考えている事を理解してくれたように。

「……………良いのか？」

「うん。まだ、幾つか残ってるし、写真も、あるから。」

ゆっくりと、しかしはつきりと彼女は答えた。

「わかった。」

私は老夫婦に今は親が居ない事、帰る家も無い事、自分達は血が繋がっていない事等を話した。そして最後に、ここに住まわせてもらうお礼に、優菜の母である志保の形見をもらって欲しいと頼んだ。ただ、何処でどう間違えたのか最終的に、

「私達をここに住まわせたくばこれを受け取れ。」

「くっ、そんな……………」

「お兄ちゃん、そんなに押し付けなくても……………」

「ばあさん、ここまで言うんだからもらってやろう。」

…………どうしてこうなった。

結局、私が老夫婦を脅す形で、志保の形見を押し付けてアパートに住まわせてもらう事になった。優菜はとても複雑そうな顔をしていたが気にしない。

そんな事をしているうちに、図書館の開館時間になったので、私達は図書館に向かった。

優菜は最初、老夫婦が見ていくれと申し出てくれたが、

「お兄ちゃんと一緒にいい。」

と言ってついて来た。

ちよっと嬉しかったのは秘密だ。

図書館に着いた私達は早速この世界の事について調べ始めた。しかしこの世界は本当に前の世界とそっくりな様で、調べた限りではいくつかの地名や、地形が変わっている程度で、後はだいたい私の記憶と相違は無い。ただ、冬木が無くなっていたのはやはり悲しかった。無論、この世界に来る前から覚悟はしていたが、ここまで似ているならばもしや、と期待してしまった分余計に落胆も大きくなる。ちなみに、優菜はここまで歩くのに疲れてしまったらしく、椅子に座って大人しくしている。ありがたい事にはありがたいのだが、前までは活発で明るい娘だったので、こんなにも静かだと逆に心配になってしまう。

言うなれば、うっかりしないあかいあくまの様なものだ。何？まだ小さくなった事を根に持っているのか、だど？当然だ。そのせいでこちらは戦闘もままならない状態にされてしまったのだから。

「優菜、ただ待っているだけというのも暇だろう。これでも読んで

いたらどうかね。」

そう言って私は彼女でも読めそうな本を一冊取り出して、

「いない。」

ゆっくりと元の場所に戻したのだった。

第0話 許し・戸惑いの異世界（後書き）

自分でストーリー考えるの難しい！

ということからプロログより先の話しに行っちゃいます。

ちなみに作者は書き溜めとকাশないので、リクエストがあれば出来る限り受け付けます。

例…淫獣ユーノフラグを立ててユーノにあんなお仕置きをして！

とか、フェイトちゃん萌え！ということでしたと士郎とフェイトでこんな事させて！

てな具合でお願いします。

では

第1話 時は流れて（前書き）

どうにか読みやすくならないかと、試行錯誤しているので、できれば書き方についてもアドバイスを頂ければ嬉しいです。

第1話 時は流れて

私と優菜がこの世界に来て速くも二年が過ぎた。

そして今日、私は……

「皆さん、おはようございます！」

「「「オハヨーゴザイマス!!!」」」

小学三年生になった。

人間の適応力とはすごいもので、最初は恥ずかしかったこの大きな声での挨拶も、二年もすれば慣れてしまった。

事の始まりは二年前。

私達があの老夫婦——桂夫妻の管理するアパートに住み始めてから少し落ち着いた頃だ。

私達が学校に行っていない事を桂夫妻が知ってしまったのだ。

そんな事ではいけないと強引且つ迅速に入学させられたのがここ、私立聖祥大附属小学校だ。

何でも、ここの理事長は以前この老夫婦にお世話になったとかで、もう入学募集を締め切っていたにも関わらず入学試験を受けさせてもらえた（名門私立小学校なので入学試験がある）。

私としては、今更小学校で学ぶ事も無いので遠慮したい所だが、私の事情を話す訳にもいかなないので仕方なく受験することにした。

受けさせてもらう以上は手を抜いてわざと落ちるのは桂夫妻に失礼にあたるし、何より小学校の入学試験に落ちるのはあまりに恥ずかしい。

別に誰も私を責めたり、笑ったりしないだろうが、二十代後半にもなって小学生の問題を間違えるのは私の沽券に関わる。

そう考えていたらいつの間にか全ての問題に正解してしまっていた。ちなみに、優菜も強制的に近くの保育園に入園させられた。

こっちに來てしばらくはふさぎ込んでしまい、ろくに食事もとらずに部屋の隅で丸まっていたので当時は心配していたが、保育園に通い初めて同年代の子供達と遊ぶようになったからか、この頃から少しずつ以前の様な明朗な性格に戻って行った。

今ではすっかり元の、こちらに來る前と同じ笑顔を見せる様になって、安心している。

こればかりはこの保育園を紹介して、お金まで出してくれた桂夫妻に感謝してもしきれない。

お金と言えば、流石に何から何まで桂夫妻にお世話になる訳にはいかないのです、私はとあるバイトを始めた。

そのバイトとは――

「士郎君。お母さんがこの前はシフト入ってないのに手伝ってくれて

ありがとうって言ってたよ。」

この茶髪をツインテールにした、将来はきっと美人になる事を確信させる可愛らしい美少女——高町なのはのご両親が経営している洋菓子喫茶——喫茶翠屋で働かせてもらっている。

「そうか。ありがとう、なのは。それと、桃子さんに、新しいケーキのレシピを考えたついたから今度のバイトの時に実物を持って行くと伝えておいてくれ。」

「うん。わかった。それで、そのお………」

元気に返事をしたかと思えば、急に恥ずかし気にもじもじし始めたなのは。

毎度の事なので、理由はわかっている。

「心配しなくともちゃんとなのは達の分も持っていくから安心しろ。勿論、そこでコソコソと立ち聞きしている二人も食べるの难道?」

問い掛けると、驚いた様に体を震わせる二人の人影。

「何よ!別にコソコソと立ち聞き何てしてないわよ!ただちよっと、離れたところで話を聞いてただけじゃない!」

どこぞのあくまの様に吠える、西洋人の血を引いている事を主張するきらびやかな金髪に、凜とした雰囲気から、なのはとはまた別の種類の美女になることを予測させるこの美少女——アリス・バニングス。

彼女をもう一人の立ち聞きの下手人である、紫の髪にカチューシャをしたアリサとは正反対のおっとりとした雰囲気を持つ美少女――月村すずかが宥め…………

「アリサちゃん、それを立ち聞きって言うんじゃないかなあ。」

る訳では無い様だ。

「何よ！それならすずかも同罪でしょ！」

言い返すアリサだが、

「アリサ、それでは自分も立ち聞きをしていたと認めるのだな。」

「えっ？…………あっ、いや、そうじゃなくて…………ああ、もう！なのは！あんたのせいよ！」

「ええー！？なんでー！？」

としどろもどろになりながら弁解にならない弁解をするアリサ。

それを見て笑う私達にアリサが逆ギレして、何故かその矛先はなのはに向かう。

それを見ながら私とすずかでまた笑いあう。

それが今の私の日常だった。

――

彼女達に出会ったのは、私がこの学校に入学してすぐの時だ。

私は魔力と良く似たエネルギーをなのはから感じたので、こっそり後をつけていた。

当然、この時はまだなのはの事は知らなかったので、彼女がこの世界独特の魔術師の家系の者で、わざわざ膨大な量の魔力を振り撒いてこちらから接触するよう誘っているのかと警戒していたが、それにしては不可解な行動を彼女がとったのだ。

その時、この三人が喧嘩を始めたのだ。

カチューシャをアリサに奪われて泣くすずか。

それを諫めるなのは。

なのはに逆ギレして喧嘩を始めるアリサ。

それをやめさせる為に急に叫ぶすずか。

三人ともそこで動かなくなってしまったので、私がたまたま通りかかった風をよそおって、茫然とするアリサとなのは、怒れるすずかを宥めながら三人の話を聞いて、全員を仲直りさせたのがこの関係の始まりだ（ちなみになのはは、ご両親からは魔力を感じなかったため、たまたま膨大な魔力の様な物を持ってしまった一般人のようだ）。

それ以来、私達は仲良し四人組として校内で有名になった。

ちなみに、有名になった理由のほとんどはなのは達の容姿が原因で、後は私が前の世界の高校時代の様に壊れた電化製品を直したりと便利屋紛いの事をやっているうちに『聖祥のブラウニー』という不名誉なあだ名をつけられてしまったからである。

また、私達四人組を指す時は『聖祥に住むの四匹の妖精達』（フォーフェアリーズ）と呼ばれ、いつの間にかこの聖祥に『妖精達の花畑』（フェアリーズガーデン）というファンクラブまで出来ていて（所詮は小学生の考えた事なので、ネーミングセンスについては触れないで置く）、私達四人を不可侵の存在とするという不文律があるらしい。

まあ、私の場合はいつもの達と一緒にいることと、ブラウニーが妖精の一種であることから、とりあえず入っているだけだろう。何せファンクラブのなかには、なのは・アリサ・すずかの三人を女神と崇め敬う集団もいる程で、その中には中等部や、一部高等部の生徒もいるらしい。

……大丈夫か聖祥。

とは言え、ファンクラブが作った不文律は私にとってはとてもありがたい物だ。

この不文律が無ければ、私は毎日学校中を会員達と鬼ごっこして回る事になっている事だろう。

事実、一度その様な事態に陥った事がある。

それはファンクラブが結成してすぐの頃。

当時も、今程では無いがかなりの人数が所属していたファンクラブの会員達が結託して、私になのは達から手を引く様に迫って来たのだ。

今でこそ効率的なトレーニングと、度々行った体が壊れる寸前の無茶な修業のおかげで小学生ではありえない身体能力を有しているが、当時はまだ年齢の割には体力がある程度だったので、一部の女子の手助けも虚しくすぐに捕まってしまった。

そして、魔女裁判よろしく桀刑にされていた所を、なのはの、

「士郎君をいじめちゃダメなの！」

という可愛らしい怒りの声や、

「あんた達下級生一人相手に寄ってたかって恥ずかしくないの!？」

という幼くも迫力十分のアリサの叫びや、

「あ…あの……やめてください。」

というすずかの涙目になりながらの訴えにより何とか救出された。

それ以来彼等も学習したらしく、あの三人に嫌われない様にするため、不文律の対象に私も含めたらしい。

――

――

――

ある日、私達四人と、今年から一年生として入学した優菜が昼休みに屋上で弁当を食べていると、アリサが一時間目の国語の将来の夢という作文について話を振って来た。

「将来か、アリサちゃんとすずかちゃんはだいたい決まっているんだよね？」

「そうね。私はお父さんもお母さんも会社経営だからいっぱい勉強して跡を継がなくちゃってくらいね。」

「私は機械系が好きだから、工学系の専門職なんかがいいんじゃないかなって思ってるよ。」

「なのははやっぱり喫茶翠屋の二代目？」

「うーん、確かにそれも将来のビジョンの一つだと思う。私、特技や取柄っていう突出したものがないし・・・」

「バカチン！ 自分でそういうことは言わないの！！」

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ないこときつとあるよ！」

「だいたい、理数系科目で私と同じくらい取ってるのに特技や取柄がないってどういう事よ！」

「にゃ、いや、それは……あ、そ、そういえば、士郎君と優菜ちゃんは何か将来の夢ってあるの？」

アリサが「逃げたわね。」と言わんばかりに睨んでいるが、何とか話題を自分の事から逸らしたなのは。

変わり身に使われた優菜は

「私はお兄ちゃんのお嫁さんになる」

即答した。

あまりの嬉しさにしばし感動していると、

「あらゝ？よかったわね士郎。もう将来の結婚相手が見つかったみたいよ？」

アリサがからかおうとしてきた。

だが、あえてアリサを無視して優菜に話しかける。

「ありがとう。優菜。それはとても光栄だが、非常に残念な事に日本では兄妹は結婚出来ないのだよ。」

「えゝ。」と優菜が心底残念そうな声を出す、こればかりはどうしようも無い。

「じゃあ士郎君は？」

「ふむ。将来の夢か……少し前までは明確にこれと言える物があったのだが。今は精々『幸せになる事』や『優菜を幸せにする事』といった曖昧な物しか無いな。」

何故か一瞬、気まずそうに全員が沈黙した後、アリサがつまらなそうに口を開いた。

「何て言うか、平凡過ぎて面白味に欠ける夢ね」

「アリサちゃんダメだよ。人の夢にそんなこと言っちゃ。」

「だってホントの事じゃない。」

「もう……」

なのはがむくれたが、本気で怒っている訳ではなさそうだ。良くわからないが、これがアリサなりの気遣いなのだと理解した。

「そうだ！あんた翠屋で働いてるんだから、なのはと結婚して一緒に翠屋継いじやいなさいよ。」

アリサが再び私となのはをからかおうとする。

「にやにや！？にやに言ってるのアリサちゃん！？」

「そうだ。冗談でもあまりそういう事は言わない方がいい。私は気にしないが、私の様な者と一緒にされてはなのはが迷惑だろ？」

そういうと、優菜が騒ぎ、アリサが睨み、なのはが拗ね、すずかは困った様な微笑みを浮かべた。

なんでさ……

――

――

――

sideアリサ

昼休み、あたし達は国語の将来の夢の作文について話していた。

「じゃあ士郎君は？」

さすがが士郎に尋ねる。

実は密かにコイツの夢は気になっていた。

コイツは、普段は妙に大人ぶってるのに、たまに優菜ちゃんと同じ年何じゃないかと思う程幼く見えたりして良くわからない部分が多い。

だから一番予想がつかなくて面白そうな答えを言いそうな気がするのだ。

「ふむ。将来の夢か……少し前までは明確にこれと言える物があったのだから。今は精々『自分が幸せになる事』や『優菜を幸せにする事』といった曖昧な物しか無いな。」

少し考えた後、私の唯一の男友達はそう言った。

しかし、幸せなんて言葉を使いながらも、その顔はまるで遊園地で迷った子供の様だった。

特に、『自分が幸せになる事』と言った時の士郎の顔は、今から大罪を犯そうとしているかの様な人間の顔だった。

皆もそれを感じ取ったのか、一瞬誰の声もしなくなる。

皆どう反応していいかわからないのだろう。

だから私は

「何て言うか、平凡過ぎて面白味に欠ける夢ね」

またいつもの様に会話を続ける。

これはきつと、私達が簡単に立ち入っていい話ではない。

私は向こうから話してくれるまでは何も聞かずにただこの莫伽を茶化しておく事にした。

そしてなのはが私に続いて、会話を続行した。

アイツは、自分がどんな顔をしていたのか気づいていない様で、不思議そうな顔をしながら話を続けた。

今度コイツに何か面白い事をさせようと心に決めて、私はその後何事もなくその日の放課後を迎えた。

side out

第1話 時は流れて（後書き）

実質五話目にしてようやく本編突入です。

ちなみに、ファンクラブについては、また外伝の様な形で話を書くつもりなので、こんな事細かに書きました。こちらもしクエストと同じく、もうしばらくして落ち着いたら書きますので、しばらくお待ち下さい。

後、桂夫妻のキャラ設定を書きましたが見ても本編とは関係無いので、興味のある人はご覧下さい。

第対話 夜空の天の川（前書き）

落ち着いたらとかいいながら、いきなりの外伝です。
しかも、リクエストをもらったネタですら無いという。

次はきちんと本編なのでご安心をば。

リクエストをくださったa1utoさん本当に申し訳ありません。
次の外伝は必ずリクエストを頂いた話を書きますので、後容赦ください。

第対話 夜空の天の川

七月七日、一般的に七夕と呼ばれるこの日も、もう終ろうとしている。

今日は翠屋で七夕パーティーをしたりして年甲斐も無くはしゃいでしまったせいか、まだ興奮している様なので、私はクールダウンも兼ねて夜の鍛練の後ランニングに出た。

ジュエルシード事件——現在はPT事件と呼ばれる、多くの人達の運命を動かした事件も少しずつ過去の事となりつつある。

管理局への今後の対応方針もある程度固まって来たし、何よりリンディ提督からの勧誘が減ってきたので今まで頭脳労働に使っていた時間を他の事にあてる事が出来る。

これからすべき事を考えながら走っていたら予定より遠くに来すぎてしまった様で、私は見覚えのない公園にいた。

近くの看板を見ると、ここは中丘町という町らしい。

少しこの公園で休憩してから帰ろうと思い、ベンチを探していたら、そこに一人の少女が空を見上げていることに気が付いた。

その少女の存在感は希薄だった。

それは誰かが彼女を人と関わらせない様にしているかの様に見えた。

その少女は車椅子に乗っていた。

それは誰かが彼女を何処にも逃がさない様にしているかの様に見えた。

その少女はすべてを諦めたかの様だった。

それは誰かが彼女に絶望を見せ続けている様に見えた。

そしてその少女は、何故かあの弓兵の様に見えた。

「今日はよく天の川が見えるな。」

昔の自分の口調を意識しながらいう。

少女は驚いて振り向くが、すぐにまた星を見上げた。

「そやね。」

私達はしばらく無言のまま満天の星空を眺めていた。

「君の名前は？」

私が空を見上げたまま、少女に尋ねた。

「八神はやて。変わつとるやろ？君は？」

少女——八神はやてもまた、上を向いたまま聞き返してきた。

「衛宮士郎。」

「なんや。普通やな。」

「ほっといてくれ。」

それからまた少し、沈黙があつた。

「うちな、実は、月も星もあんま好きじゃないんよ。」

「へえ。それは珍しいな。どうしてだ？」

彼女の声にはわずかながら憎しみがこもっていた気がした。

「真っ暗な中で月や星だけが光つとるのを見てるとまるで、希望の光には絶対に手が届かない様な気がしてくるから。だから、雷とかも嫌いやな。遠くに落ちるほどそんな気がしてくる。」

私の位置からでは八神の顔を確認することはできない。

私が口を開こうとすると、八神がこちらを向いて、再び話始めた。

「うちな、見ての通り歩けないんよ。」

私は黙って聞く。

「親もおらんし、学校にも行けへんから友達もおらん。ご近所さんとは仲悪い訳やないけど、みんながご近所付き合いとるのは『八神はやて』やなくて『両親を早くに亡くした足の悪い可哀相な女の子』や。」

少女——八神はやては静かに語る。

「病院の先生——石田先生って言うんやけど——も一生懸命頑張ってくれとって、いつも『頑張れましよう』『きっと大丈夫よ』って言うてくれる。けど、何となくこの人にもこれ以上はどうにもできないのやってわかってくると、もうどうにもならんのやって思えてきて……」

「諦めてしまおうと？」

「……正確にはしまった、かな。」

少しずつ八神の口調に熱がこもる。

「毎日毎日頑張って生きて、それでもうちを取り巻く事態は何一つようならん！誰もうちを、『八神はやて』として見てくれへんし、足はピクリとも動かへん！生きていてもつらいだけや！お願いやから、誰か『うち』を見て！誰か『うち』の声を聞いて！こんなことなら、うちは『うち』である必要なんて無い！そんなら……」

と八神が急に黙った。

「ごめんな。こんな初対面の人に話す事ちゃうのにな。」

振り向いた八神の顔は、笑っている様にも、泣いている様にも見えなかった。

「今日なら、織り姫様や彦星様がお願い事、一つくらい叶えてくれるかな思ったんやけど、期待したただけ無駄やったな。」

「それなら、代わりと言っては何だが、私の願いを叶えてもらえないかね。」

気付けば私は自らを繕う事もせずに口を開いていた。

彼女は危うい。

全てに絶望して、あらゆる希望を拒絶しそうになっている。

私はいくつもの戦場でそんな人々を見てきた。

多くの命を理不尽に奪われ、希望することに絶望してしまった人々を。

そうなってしまえば、残る道は無気力か、自らの殺害。

その二つに一つだ。

そうなる前に、どうかして彼女に明確な希望を与えねばならない。

「願い?」

不思議そうに八神が聞き返してくる。

「ああ。私の願いだ。実は、私は人付き合いが苦手だね。あまり、友人と呼べる人間は多く無い。だから、もしよければ私の――友人になってほしい。」

その言葉を聞くと、八神雷に打たれた様に固まった後、俯いて震え出した。

「そんな……やめて……そんな、同情だけで、友達になろうとか、そういうこと言わんでな……また、期待してまうやないの……もう期待して、裏切られるんは嫌なんよ……だから……」

「同情の何が悪い？どんな形であれ、人は何の感情も抱かない無關心から友情を見出だす事は無い。ならば今は同情だけでも知れないが、一度繋がりを作れば、他の感情なんて後からいくらでも生まれてくる。例えば、私の友人は最初は喧嘩から始まった。友人の一人がいじめっ子でもう一人がいじめられっ子。最後の一人がいじめっ子を諫めて喧嘩になったところを私が仲裁して、そこから今ではお互いに親友と呼ぶに相応しい仲にまで発展した。そんな友情の芽生え方もあるのだから、私達の友情がうまくいかない道理が一体何処にあるというのだね？だから、何度でも言わせてもらおう。八神はやて、私と友人になってほしい。」

私がそこまで言い切ると、八神は涙声になりながら尋ねてきた。

「……なあ、衛宮君。友達になるってどうすればええの？」

「ふむ、私の友人が言うには名前を呼べばいいらしいぞ。」

「そか。………土郎君。」

「何だ？——はやて。」

「！………なんや、友達を作るって、簡単やん。」

それだけ言って、はやては泣き出した。

その涙はまるで、この夜天に光る星のようだった。

「なあ、えみやん。」

「え、えみやん？」

いきなりの妙な呼称に動揺しながらも聞き返す。

「あだ名や。士郎君やと、なんか普通過ぎておもしろいやろ？でも衛宮って珍しい苗字やから、そこから取って、えみやん。呼びやすいし、可愛らしいからええやろ？」

「ま、まあ別に構わんが……それよりどうかしたか？」

「あ、うん。今気づいたんやけど、えみやんなんか喋り方変わってらん？最初は普通やったのに、今は私とか言ってなんや“出来る大人”みたいな。」

「ああ、これか。実はこちらが私の本来の話し方でね。ただ、私の様な子供がこの様な話し方をするのは少々変わっているだろ？だから仲の良い友人以外の前では、出来るだけ先程の様な話し方をするよう心掛けているのだよ。」

「へえ、そうなんや。」

それから私達は少し雑談していたが、時間も遅いのですぐに家に帰

る事にした。

はやてが少しごねたが、

「明日もまた来るから。」

と約束して頭を撫でてやると、おとなしく引き下がった。

別れ際に「ありがとう。」と小さな声が聞こえたが、私は聞こえない振りをして走り去った。

私は、はやてを家に送り届けると、自分も帰路についた。

八神はやて。

私の経験上、少なくともまだ彼女となのは達を会わせない方がいいだろう。

なのはは、言い方は悪いが、劇薬なのだ。

例えば、アリサやすすずかと出会った時も、一歩間違えばあの二人と仲良くなるどころか、敵対していてもおかしくなかった。

P T事件の時も、なのはという劇薬のおかげでフェイトは精神を持ち直したが、あの時だって、うまくいかなければなのはの希望の大きさに押し潰されて、あの事実を知るより早く悩み疲れてしまっていた可能性があったのだ。

だから、なのはにはやてを紹介するのは彼女が希望に慣れて、より精神が安定してからだ。

そうでなければ、はやての精神はなのはの大きすぎる希望に押し潰されて、心を凍らせてしまう。

そこまで考えたところで、私は一旦その思考を頭から追い出した。

今はとにかくあの車椅子の少女のために明日はどうしてやるかを考えるべきだ。

明日の予定は既に一つ入ってしまったているのだから、一刻も早く寝なければならぬ。

かなり身体能力は高いとは言え、ただの小学三年生であるこの体では睡眠時間が少ないと、身がもたない。

新しく出来た友人に思いを馳せながら、私は帰路を急いだ。

第対話 夜空の天の川（後書き）

という事で今回は『士郎君、はやてちゃんに会おう（フラグを建てる）』でした。

……わかってます。わかってますからグダグタについてはもう触れないで下さい。

あつ、でもアドバイスをあれば下さいね。

いきなり外伝の上にもうPT事件が終わっていて驚いている方もいらっしゃるかと思います。

当然です。

なんせ作者もその一人なのですから。

なんかふと思いついて、ちょっとメモ程度に書き起こして置こうとか考えていたら、勢い余って書ききってました。

次の本編は、アニメ第1話の裏側から続けます。

士郎君にはもう少し魔法について知らないままでもいいと思います。

ではではノシ

第2話 平穩の軋み（前書き）

ふと閲覧数を見たら26000アクセスを越えていました。

いつもこの様な小説を読んでくださっている皆様誠にありがとうございます。

今後とも一層精進して、より良い文章を皆様に提供出来るよう心掛けていきますので、今後とも遠坂士郎と魔法少女リリカルなのはSwordをよろしく願います。

第2話 平穩の軋み

放課後になり、なのは達はこれから塾があるとの事で、校門の所で別れを告げる。

私は一旦帰って荷物を準備してから、優菜と共に月村邸に向かった。

これは別に私がボケてしまって、すずかがいない事を忘れたのではなく、今回、私が入が有るのはすずかの姉——月村忍さんだからだ。

彼女とは学校に入学する前からの知り合いだ。

月村邸は、冬木の遠坂邸と同じ役割を果たしており、そこを調査するにあたって彼女達と知り合う事になった。

初対面こそ険悪な雰囲気で、あわや満足に動かない体で現役の剣士を相手取る事になる羽目になりかけたが、今では霊脈の管理からメイド達の教育まで任せられる程の信頼を得ている。

その際に、月村の夜の一族に関する秘密を知らされ、魔術の事はその交換条件——私なりの契約の証として話した。

そして本日は、その霊脈のメンテナンスを行う日である。

チャイムを鳴らすと、聞き慣れたメイドの声が聞こえた。

「衛宮様ですね。今お開けします。」

門の電子ロックが解除される音がしてから、私は中に入る。

数分後、ようやく到着した巨大な邸宅の前で私達を迎えてくれたのは、先程チャームに対応したメイド——ノエル・K・エアリヒカイトその人である。

「ようこそいらっしやいました。いつもありがとうございます。言葉と共にお辞儀をするノエル。」

「気にしないで下さい。優菜の教育にもなりますから。」

それは去年の事である。

ある日、優菜が突然魔術を習いたいと言い出したのだ。

勿論私は頑なに反対したが、彼女の意志は固かった。

そうして何日も彼女と議論しているうちに、私は昔——私が切嗣に魔術を教えて欲しいと懇願していた時の事を思い出した。

今思えば、当時の切嗣も同じ心境だったのだろう。

そう思うと、私はそれ以上優菜の頼みを拒否出来なくなり、結局危険性の低い物なら少しだけと約束してしまったのだった。

side 優菜

学校から帰ると、私はお兄ちゃんと一緒にすずかちゃんのお家に向かいました。

すずかちゃんのお家には霊脈ってというのが通っていて、それを使えば、この町全体に結界を張り続けたり、すずかちゃんのお家に住んでいる人達の運を良くしてあげられるんだってお兄ちゃんが言っていました。

ちなみに、今張っている結界はただ結界内に於ける魔力の行使を察知するだけの物で、これを使えば、私やお兄ちゃんだけで無く、魔力を持つ者がなんらかの魔術を行使しただけでその居所を察知し、私達に知らせてくれるそうです。

似たような力を持つのはちゃんが魔力を行使した場合もわかるらしく、先日なのはちゃんの魔力に似た異質な魔力が使われたそうですが、残念な事にお兄ちゃんが向かった時には魔力の発信源は居なくなっていたそうです。

そして優菜は、お兄ちゃんからその時の魔力は結界の誤作動じゃないかと調べる為のメンテナンスを任されているのです。

これは、優菜がお兄ちゃんに魔術を教えて欲しいと頼んだ時に教えてもらった事の一つで、これがうまく出来た日の晩御飯は、優菜の好きなおかずを作ってもらえます。

でも、この魔術だけではまだ足りません。

そもそも、私が魔術を習おうと想ったのは、お兄ちゃんを守りたいからです。

彼は、世界中の人達を救うために戦っていました。

彼は、私をいっぱい助けてくれました。

そして彼は、いっぱい傷付きました。

お兄ちゃんがまだ大きかった時、一度だけだけど、一緒にお風呂入りました。

その体には多くの傷痕がありました。

それはまるで、お兄ちゃんが罰を受けた証であるかの様に見えました。

その傷は、ちっちゃくなってしまった今でも、何故か消えずに残っています。

それはまるで、あの世界がまだお兄ちゃんの罪を許していないと言っているかの様に見えました。

その傷を見た時、私は決意しました。

今まで助けられていた分、今度は私がお兄ちゃんを守らなければならぬ。

今、お兄ちゃんは平和の中で幸せを探しています。

しかし、お兄ちゃんが今の平和を乱す者の存在を認めてしまえば、その時は、自らを顧みる事無くその存在の抹消に全力を注ぐのは間違いないと思います。

前の世界で私を助けてくれた時も、迫り来る車に自分が轢かれる可能性など、ちっとも気にした様子はありませんでした。

だから、私はもっと強くなって、お兄ちゃんが不穏な存在を察知する前にその存在を抹消出来る様にならないのです。

s i d e o u t

|

——|

——|

優菜が海鳴の探知結果をメンテナンスしている間、私はノエルとその妹のメイド——ファリン・K・エアリヒカイトに紅茶の煎れ方の指導をしていた。

霊脈の管理はもう何度も優菜に任せた事があるし、遠坂の餞別の魔導書も持たせてある。

それに何より才能があるので、多少のトラブルは自分で何とかしてしまうだろう。

とは言え、どんなに才能があってもまだ半人前だ。

まあ、半人前が教えているのだから仕方ないといえば仕方ないが、

これはつまり私ではあの娘を一人前にしてあげられないということだ。

このままでは、魔術の事で大きなトラブルが発生すれば、だれも対応出来なくなる可能性がある。

勿論、私の手に負える魔術だけを教えていれば良いだけの話ではあるが、何時どんな事が起こるかわからない以上、保険も何も無い今の状況は望ましいとはとても言えない。

後、前に優菜に何故魔術を教わりたいかと尋ねたら、詳しい事は言えないが、力が欲しいからだと言った。

彼女は優しい娘だから間違った使い方をすることはないだろうと信じているが、それでもまだ子供だ。

間違いを起こさないとは言い切れない。

「衛宮君？どうしたんですか？」

「っと、すみません。ちょっと考え事を。」

どうやら優菜の事に気を取られてボーッとしていた様だ。

「優菜様の事ならきっと大丈夫ですよ。魔術の事はよく知りませんが、何度もやって大分慣れたとこの前言っていらっしやいましたから。」

ノエルさんが心を読んだかの様にそう尋ねてきた。

「それはわかってるんですが、やっぱり気になってしまっ………
過保護ですかね？」

私は苦笑する。

「そんなことはありません！家族を心配するのは当たり前のことです
から。」

ファリンさんがヒマワリの様な笑顔で笑いかけてくる。

「ありがとうございます。ファリンさん。」

何か魔術の代わりになるより安全な力があればいいのだが。

そんな思いを最後に、私は一旦優菜に関する思考を頭の隅に追いや
った。

――

――

――

一時間程すると、いつの間にか優菜がニコニコしながら私の傍で座
っていた。

「ああ、優菜。もうメンテナンスは終わったのか？こちらもう終
わったから少し待っていてくれ。」

私は急いで今日使った物を片付けて、月村邸を出ようとすると、忍
さんに出会った。

「あら、士郎君。もう終わったの？」

「はい。チェックも終わったので、そろそろお暇させてもらおうかと。」

「ちょうどよかったわ。前に頼まれていた工房だっけ？その事だけど、なんとかなりそうよ。」

「本当ですか!？」

工房の件というのは、私が海鳴りに来てから二年が経ち、ほとんどの懸念案件がクリアされたので、ここに根を下ろすにあたって魔術の工房があれば何かと便利なので、もし条件を満たす物件があれば紹介して欲しいと頼んだのだ。

かなり特殊な条件だったので、そうそう見つからないだろうと思っていたのだが、まさかこうもたやすく見つかるとは。

「もちろんホントよ。今日はもう遅いから、また今度うちに来た時にでも詳しく話すわね。」

「はい。ありがとうございます。」

私は月村の当主に一礼をしつ、月村邸を後にした。

――

――

――

「さあ優菜、今日の夕飯は何かリクエストはなにかね？」

残念ながら、結界には特に不備もなかったが、とりあえず海鳴の霊脈の管理は出来ていたので、私は優菜へのご褒美として今日のおかずに優菜の好きなものを作る事にした。

優菜は元々の才能もあつてか、成長速度も早く、最早霊脈の管理なら私がやった場合とほぼ遜色がない。

そろそろ月村の霊脈の管理は完全に優菜に任せようかと考えている。

「ハンバーグ！」

「そうか。ならば材料を買いに行くのでしょうか。」

そうして私の最後の日常は何事も無く過ぎて行つた。

――

――

――

その夜、優菜を寝かしつけて鍛練をしていた私は、突然結界内に大きな魔力の奔流を感じ取った。

「この魔力……まさかなのは！？」

この予測がただの勘違いであればそれに越したことはないが、今回の魔力はあまりに似過ぎている。

私が魔力を感じた場所に行ってみるとそこには、

まるで獣が暴れたかのような傷痕が痛々しく残っていた。

第2話 平穩の軋み（後書き）

やばい。

今回はいつもに増してグダリ方がハンパない。

なんかもう今回は皆様に申し訳ありませんでしたと言う他ありませんが、次回はきつともう少し読みやすい者を提供出来ると思いますので御勘弁下さい。

後、最近外伝のネタも溜まってきたので、そちらもまた近い内に執筆しようかと思っていますのでお楽しみに。

また、はやてやアリサ&すずかのキャラ紹介に関してですが、はやてはA・Sが始まる前に、アリサ&すずかはそれぞれの外伝を書いたら載せようと思います。

ではではノシ

第3話 魔法の存在（前書き）

今回は前回よりましな文章が書けました。

第3話 魔法の存在

謎の魔力を察知した夜から一晩が明けた。

あの後、周辺を調べてわかった事は、今回の件になのはほぼ確実に関わっているという事だ。

本人に直接確認を取った訳ではないが、あの周辺に残っていた魔力の残滓が如実になのはの存在を物語っている。

それでも一縷の望みを賭けて一度高町家まで行ってその晩のなのはの動向について尋ねてみたが、どうやらこっそり何処かに出掛けていたらしいという返答により、逆になのはが関係者であるという疑惑をより確信に近付ける結果となってしまった。

一応なのはの家族には最低限の説明と、必ずなのはに怪我をさせる事なくこの件を終結させると約束して帰宅した。

そして今は、いつもより早く優菜を起こして昨晚の事件について説明している。

テレビをつけるとちょうどよく昨日現場がニュースで取り上げられていた。

流石に魔術なんてとんでもない放送は出ていないが、これがもし前の世界で起こっていたらと考えるとゾッとする。

「———という事で私は今後しばらくはこの件についての調査と解決の為に動かねばならないが、優菜はできればいつも通りに過ごし

て欲しい。」

「えっ？なんで？」

「今回、もし可能ならなのははこの件から手を引かせるで、今後こういう事には首を突っ込まないようさせるつもりでいる。その場合、出来るだけ私達が魔術の関係者であるという事は知られずにいた方がいい。この事件が終わった時に彼女や一部を除く周囲との関係を変化させるのはあまり好ましい事では無いからな。優菜だって、なのはと気まづくなりたくはないだろ？」

「で、でも優菜だってお手伝いくらい出来るよ？」

目をウルウルとさせながら優菜が尋ねてくる。

いつもならここで許可を出してしまう所だが、今回ばかりは許す訳には行かない。

「すまないが、こればかりは譲れない。二人で動けば、その分なのはに私達の事を知られる可能性が上がってしまう。」

「そ、それはそうだけど……でも………」

まだ食い下がろうとする優菜の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「では、こうしよう。もしこの件が私だけでは対処しきれないと思った時には、真っ先に優菜の力を借りよう。それまで優菜は力を温存しておいて欲しい。頼めるか？」

そう頼みながら微笑むと優菜は頬を朱に染めながら頷いた。

「うん、わかった。」

どうやら納得してもらえた様だ。

実際には優菜の力が必要になる場面など恐らくないだろう。

故に罪悪感も多少はある。

だから優菜よ、「お兄ちゃんずるい………」と恨めしい顔で見るのは勘弁して欲しい。

――

――

――

それから私達は学校へ行く準備をして、桂夫妻に挨拶をすると、バスに乗り込んだ。

その時になのはと乗り合わせたが、いつものように雑談をしているうちにバスは学校へと到着した。

もしなのはと自然に二人きりになれば、それとなく昨夜の事について尋ねてみるつもりだった。

だが、

「ねえ、ねえ、今朝のニュース見た？」

アリサのこの言葉で手間が省けた。

「今朝のニュースって？」

「あのフェレットを預けた動物病院の近くであつた事故の事よ！」

「フェレット？」

「そういえば士郎君は昨日はいなかったんだよね。」

「昨日塾に行く途中になのはが怪我したフェレットを拾つたのよ。」

「なるほど。そしてそのフェレットの治療の為に預けた動物病院が今朝のニュースでやっていた事故現場の近くにあるという事か。」

「そういうこと。昨日フェレット大丈夫かしら？」

「あ、それなら大丈夫。今は私の家にいるから。」

「えっ?! なんで？」

「えっと、なんか逃げて来ちゃったみたいで。」

「それなら病院に戻した方がいいんじゃないか？ 榎原動物病院だったか？ その人も心配している事だろう。」

「それも大丈夫。ちゃんと連絡はしておいたから。」

見た所なのはに怪しい感じは無いが、どうもそのフェレットというのが臭う。

「それなら今日皆で翠屋に行きましょうよ。私達もフェレットを見たいし士郎にも見せてあげないと不公平でしょ？」

「まあ、私は元々バイトの為に翠屋へ行く予定だったから構わんが、なのはいいのか？」

「うん。平気だよ。」

「そうか。なら私もバイトの休憩時間にでもそのフェレットを見せてもらおうでしょう。」

――

――

――

そして放課後、私達四人に優菜を加えた五人でなのはのご両親――高町桃子さんと、高町士郎さんが経営している喫茶翠屋に行った。

先の発言からもわかると思うが私はここでウェイター兼コックとしてバイトをすることで生活費を稼いでいる。

「それでは私は厨房に行ってくる。あまり周りのお客様にご迷惑をおかけしないようにな。」

到着してすぐに私はバイトのため件のフェレット――ユーノというらしい――を愛でている女子集団から離脱する。

「」「はい。」「」

やれやれ、本当にちゃんと聞いているのやら。

「オニオンサラダとケーキセット、アメリカン上がりました。」

「はいはい。あつ士郎君はそろそろ休憩だね。」

「はい。」

出来上がった料理を店の手伝いをしているなのはの姉——高町美由紀さんに頼み、私は休憩に入る。

「あつ、士郎君。休憩もらえたの？」

「ああ、少しだけだな。」

「遅い！もっと早く来なさいよね！」

「無茶を言うな。アリサ。」

アリサの理不尽な所は遠坂にそっくりだ。

「それが三人が言っていたフェレットか？」

「うん、ユーノ君。可愛いよね。あつ、優菜ちゃん。もうちょっと優しく抱いてあげないとダメだよ。」

フェレットに首ったけの優菜にさすがが注意する。

「はい。」

窘められた優菜が腕を緩めると、これ幸いと言わんばかりにフェレット——ユーノが机の上へ逃げ出す。

疲れた様子で額の汗を拭うユーノ。

……いやに人間臭いな。

それに、なのはの物に似た魔力を持っている。

昨日見つけたらしいが、これが昨日の一件や一昨日の正体不明の魔力と無関係とは到底思えない。

恐らくコイツが昨日、なのはを巻き込んだ張本人だろう。

とにかくコイツの動向には目を光らせておく必要がある。

「士郎くゝんそろそろ。」

「はい。今行きます！」

桃子さんに呼ばれた。

休憩時間も終わり私はこれからホールに入ってウェイターをする。

今は思考を中断してバイトに集中せねば。

私はホールの制服（何故か私だけ執事服）に着替えはじめた。

夕方になりバイトが終わると、そのまま全員が解散になった。

なのははユーノと共に散歩に行くらしい。

とは言え、私はそれを素直に受け取れる程善良な人間ではない。

身体強化を使い、優菜と荷物を素早く家に置いて来ると、すぐに翠屋周辺に戻った。

なのはの運動神経と時間から考えると、あまり遠くには行けていないはずだ。

「あそこか。」

近くの電柱に登って辺りを見渡すと、神社から感じる異様な魔力と、そこに向かうべく石段を上っているなのはを発見した。

side なのは

石段を上り終わると、神社の前には大きくていかにも凶悪そうな犬がいました。

新しく出来た私のお友達の、ユーノ・スクライア君が言うには、この子も昨日の夜の獣の様にジュエルシードを取り込んだせいでこんな風になってしまったのだそうです。

そんな事を考えていると、いきなり犬が襲い掛かって来ました。

「なのは！早く変身を！」

「えっ?! 変身ってどうやるの？」

「昨日の呪文を唱えるんだ！」

「そんなの覚えて無いよ」

「じゃあ僕が唱えるから後に続いて。」

そう言って唱え始めるけど、犬はどんどん近づいて来ます。

あっ、間に合わないかも。

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。

それに士郎君と優菜ちゃん、すずかちゃんにアリサちゃん。

どうか先立つ不孝をお許し下さいなの。

そんな事を考えていると、犬はもう目の前まで迫っていた。

私は痛みを覚悟して固く目を閉ざす。

「なのは！」

ユーノ君の声が聞こえる。

ユーノ君、役に立てなくてごめんなさい。

そしてこれが最期の思考になるだろう。

私、高町なのはが最期に思った事は、

もっと士郎君の作ったケーキ食べたかったなあ。

ってちがうの！

私はそんなに食いしん坊じゃないよ！

と自分で自分に突っ込んでいると、

ズガアーーン

物凄い音が私の目の前で鳴り響きました。

思わず目を開けると、そこに巨大な犬の姿はなく、私に怪我は一切ありませんでした。

「なのは！大丈夫？」

「う、うん。でも、今のは一体……」

「そんなことより早く。今のうちに封印を！」

「あ、うん。レイジングハート、お願い。」

「Yes, master.」

すると私の姿は一瞬で学校の制服に似たバリアジャケットに変わりました。

「行くよ、レイジングハート。」

「Sealing mode.」

「リリカルマジカル。ジュエルシード、封印！」

レイジングハートから一筋の光線が走り、いかにも凶悪な犬は可愛らしい子犬になりました。

「リリカルマジカル。ジュエルシード、封印！」

レイジングハートから一筋の光線が走り、いかにも凶悪な巨大犬は、可愛らしい子犬になりました。

それにしても、さっきの犬を吹き飛ばした攻撃は何だったんろう。

「待て。」

すると急にぐもった声に呼び止められた。

私達はその声の方に振り向こうとすると、

タンッ

私達の足元に矢が突き刺さりました。

「きゃっ。」 「誰だ！」

「動くな。」

それが私の初めての魔術師との接触でした。

s i d e o u t

第3話 魔法の存在（後書き）

終わり方中途半端ですかね？

まあ何はともあれ原作二話です。まだまだ行き当たりばったりが続いて行きますが頑張ります。

第4話 正体不明の脅迫者（前書き）

今回は、全てユーノ視点で進行します。

そろそろアニメ2話が終わるかな？

想像以上に進まないorz

なお、後書きにてお知らせがあるので、ご覧下さい。

第4話 正体不明の脅迫者

side ユーノ

「なのは！」

まだバリアジャケットも装着していないのはに、ジュエルシードによって凶暴化した犬が迫る。

今からでは拘束魔法はおろか防御魔法も間に合わない。

なのはにレイジングハートをセットアップさせる事より、まずは一時的にでも安全を確保すべきだった。

いくらなのはに才能があっても、元は非魔法世界の住人なのだから、二度目ですぐにデバイスを起動させられる筈が無いのに。

これは完全に僕の失敗だ。

そして、僕のせいで起きた事故と、僕の判断ミスのせいで、本来は何の関係もない筈の善意の協力者が命を落とそうとしている。

こんな事になるなら………

後悔の言葉が頭をよぎろうとした瞬間、それは起こった。

ズガァーッ！

歪な剣の様な形をした何かが犬に飛来してきたかと思うと、明らかに慣性の法則を無視した勢いで巨大な犬を吹き飛ばした。

何があったかわからないけどとにかく今はチャンスだ。

「なのは！大丈夫？」

「う、うん。でも、今は一体……」

「そんなことより早く。今のうちに封印を！」

あの犬はジュエルシードの力で怪我はしていないけど、脳を揺られたのか今はまだ立てないでいる。

「あ、うん。レイジングハート、お願い。」

「Yes, master.」

なのはレイジングハートを起動すると同時にバリアジャケットを着する。

なのはがジュエルシードに封印を施す間、僕は周りの警戒を行う。

先程飛んできた歪な剣が誰の物かわからない。

しかも、とりあえず回収しておこうと周りを見回すが、あの剣も何処にも見当たらない。

飛んできた方を見ても人が居る様には見えないが、もしかしたら僕以外の魔導師がこの世界に居て、ロストログアを横取りしようとし

ているのかもしれない。

だが、この場には僕達とジュエルシード以外の魔力は感じない。

残念ながら僕はなのはの家族の様に気配を探る事は出来ないので、申し訳程度に警戒しながら向こうが出てくるまで待つ。

先程助けてくれたからと言って、姿も見せない様な人物が味方である保障は何処にも無いのだから。

そんなことを考えながら警戒を続けているうちに、なのはは封印を終えて戻ってくる。

巨大犬改め子犬の飼い主であろう女の人の無事も確認したので帰ろうとしたその刹那――

「待て。」

背後から魔力に似た力を感じたと思ったら、いきなり複数の矢と、布でも当てている様なくぐもった声が響いた。

「きゃっ!」「誰だ!」

驚いて振り向こうとすると、

タタタンッ

再び数本の矢が僕らを威嚇する。

「動くな。」

再び声が言う。

「もう一度言う。動くな。三度目は無い。」

不意を突かれた驚きも薄れ、今度は落ち着いてこちらから質問する。

「お前は誰だ？違法魔導師なのか？さっきの剣もお前が投げたのか？」

シュン

矢が今度は僕の毛を散らしながら通り過ぎる。

「質問するのはこちらだ。こちらから質問するまで黙っていて貰おう。ああ、一応言っておくと、嘘や隠し事は推奨しない。体に矢を生やす特殊な性癖があるなら別だかね。」

流石にここまでされては黙る他無い。

ただなのは、脅しなんだから性癖という言葉に顔を真っ赤にしなくても…………

「…………ふむ。フェレットにしてはなかなか賢いな。まあ、それならそれでこちらとしてもありがたい。では最初の質問だ。先程、魔導師と言ったな？魔導師とは何だ？」

この人…………魔導師を知らない？

でも、今後ろから感じる気配は多少僕らの物とは異なるけど確かに

魔力だ。

『なのは。』

僕はなのはに念話で話しかけた。

『ユーノ君？どうしたの？』

『恐らくこいつはジュエルシードを狙った違法魔導師だ。こいつとの交渉は僕に任せてほしい。』

『！……うん。わかった。』

こういう輩は発掘をしていた時にも何度か遭遇したことがあるし、そういう時の対処の仕方も教わっている。

実践は初めてだが、そんなことは言ってられない。

「『何だ』って、ちょっと変わってるけど、お前だって魔力を持っているんだから魔導師だろ？」

「いいから答えろ。」

「……魔導師は魔力を持ち、魔法を行使する人達の総称で、その多くは様々な職業の中でその力を役立てている。……これで満足か？」

何故わざわざこんな事を聞くのだろう？

「そうか。では、次の質問だ。先程の巨大な犬、もしくはその犬か

ら現れた宝石は何だ？」

まさか、ジュエルシードを知らない？

という事は、ロストログアを狙ってこの世界に来た違法魔導師ではないのだろうか？

どちらにしても、本当の事を言ったら面倒な事になりそうだ。

ここは何とかごまかして……

「あれは、ジュエルシードっていう危険な物なんです。」

僕がどうやってごまかそうか考えていたら、なのはが先に本当の事を言ってしまった。

「なのは！？」

「それで、私達は今それを探しながら封印しているの。だから、お願いします！あなたも私達を手伝って下さい！」

僕は慌ててなのはに念話を送る。

『なのは！無茶だよ！まだこいつが敵か味方かもわかってないのにそんなことを言って、後で裏切られるかもしれないんだよ！？』

『そうかも知れない。だけど、何となくこの人はいい人だって、そう思うの。それに――』

『それに？』

『士郎が言ってたの。「人に信じて欲しければ先ずは自分が相手を信じてやる事だ。真摯に接し続ければ相手もきつと心を開いてくれる」って。』

『なのは……うん。わかった。なら、ここはなのはのしたいようにやってみて。失敗しても、なのは僕が絶対に守るから、なのははなんの心配せずに好きなようにやって。』

『ありがとう。ユーノ君!』

「あれはジュエルシードというのか。それで、危険な物とはどういうことだ?」

向こうはなのはの提案を無視して話しを続ける。

「ジュエルシードはロストログアっていう違う次元世界に住んでいた昔の人達が作った、21個のどんな願いでも叶えてくれるすごい物なんです。だけど、お願いがおかしな風に叶えられちゃって危険だから今私達がこうして封印しているんです。」

「ロストログア? 次元世界? 何だそれは?」

「えっと、次元世界っていうのは、この地球——他の世界では第97管理外世界って言ってるらしいんだけど——以外にも沢山の世界があって、その沢山の世界のことをまとめて次元世界って呼んでいる……んだよね? ユーノ君?」

「まあ、かみ砕いて言うとなくなるかな。」

ちよっとかみ砕きすぎな気もするけど。

「では、ロストログアとは？」

再び声が尋ねる。

まさか本当に何も知らないのか？

「ロストログアとは過去に何らかの要因で消失、ないしは滅んだ古代文明の遺産の事だ。そして、古代文明が滅んだ直接的な理由がその文明によって作られたロストログアであることも少なくはない。」
「成る程、だいたい事態は飲み込めた。だが、何故そのような危険な物体がこのような魔法などとは無縁な場所に？」

……やはり、その質問が来るか。

「それは——僕の責任だ。」

「どういう事だ？」

「ジュエルシードは、僕が発掘したんだ。そして、それを『時空管理局』に持っていく途中で事故があって、それで……」

「ここに落ちてきたという事か。」

「ああ、その通りだ」

「だが、何故貴様とこの少女がわざわざ二人だけで回収せねばならん？ 先程の犬への対処の仕方を見た限り、どう見てもただの素人ではないか。それに、先の話から察するに、『時空管理局』とか言う専門の組織が存在するのだろうか？ 何故そこに連絡しない？」

「管理局には連絡した。だけど、元々管理局で働く魔導師の絶対数が少ない上に、ロストログアの封印も出来るような魔導師ともなれば、その仕事の量を考えればすぐに来れるものじゃない。」

「そうだとしても、発掘していたと言うからには、少なくとも貴様の周りには、頼る事の出来る大人もいたはずだ。しかし何故、彼等を頼る事をしないのだね？」

「それは僕の責任だからだ。だから、出来るだけ周りの人達に迷惑はかけたくなかった。」

「貴様の周りでなければいいのか？例えばその少女は見た所この世界の住人ではないかね？それはつまり、この世界の住人なら迷惑をかけといいと、そういうことか？」

「違う！元々、なのはにも迷惑をかけるつもりは無かったんだ。ただ、僕では力不足で、それで仕方なく……………」

「仕方なく、平穏の中で無邪気に暮らしていた少女に命を張って世界を守れと強要したのか？」

「それは……………」

「違うとは言えない。」

むしろ、こいつの言う通りだ。

「違うよ！ユーノ君は強要なんてしてない！これは、私の意志でやってることだから！」

「強要されてない？それは違う。君はジュエルシードの危険性と、あなたの力についてをユーノとやらから伝えられた時点で強要されたも同然だ。そんな話を聞かされれば、君でなくとも協力せざるおえないと考えるだろう。」

「……………」

僕を庇おうとしたのはも沈黙する。

「だから、君に一つ、私から提案をさせて貰おう。」

いきなりのこの言葉に僕達二人は驚いた。

「先程君は、手伝って欲しいと言っていたが、私としても、あの様な物騒な物がこの町にあってはおちおち安心して眠ることもできない。だから————ユーノとやら、貴様に協力してやろう。」

「えっ？」 「本当ですか!？」

驚く僕の横でなのはが嬉しそうな声をあげる。

「ただし条件がある。」

「条件？」

「そう。条件だ。その条件とは、その少女。」

「わ、私!？」

「君は、この件の事は一切忘れて、手を引け。そうすれば、後は私が君が知らないうちに解決しておいてやろう。」

「そ、そんな……………」

「元々君は、ただの無関係の一般人だろう？これ以上君が命を張ってまでこの件に関わり続ける意味は無いはずだ。後の事は私に任せ、君は元の平和で楽しい日常に戻るといい。ああ、私に封印が出来るのかという問題は気にしないでくれ。私には魔力殺しの武器や特殊な布がある。それを用いれば、少なくとも管理局とやらを待つ間はジュエルシードとやらを抑えておけるはずだ。」

僕はゆっくりとなのはを見る。

残念ながら背後の声に邪魔されて顔は良く見えなかったけど、なのは何かを考えている様に見えた。

恐らく、こいつの意見に乗ろうとしているのだろう。

だが、それが懸命だろう。

僕もなのはにこれ以上危ない事はしてないし、今回の事はより戦闘に慣れていそうな人に頼んだ方がいいだろう。

この人が封印出来るかどうか不安ではあるけど、これ以上無関係な一般人を危険な目に合わせるよりはずっとまだ。

僕からもそう言おうと思った矢先だった。

「なのは……………」

「ごめんなさい。でも、その提案は受け入れられません。」

「なのは？」

「ほう？どうしてだね？もう君が命を賭けて戦わずとも、私が代わりにこの世界を救ってやると言っているのだぞ？よもや名誉が欲しい訳でもあるまい。」

「それは、途中で投げ出したく無いからっていうのもあるけど、ユーノがお友達だから。友達が困ってるのに助けられないなんて、そんなの嘘だもん。」

「なのは……………」

友達。

なのはは確かに僕をそう呼んでくれた。

スクライアの一族は家族で、大切な存在だけど、友達ではなかった。他にも多くの人と出会ったけど、僕を友達と呼んでくれた人はこの人が初めてだ。

ならば僕も、ささやかながら、『友達』の願いを叶える為の力になろう。

「そういう事だ。だから、交渉は決裂した。僕達は僕達だけでジュエルシードを探す。そして、出来ることなら貴方は手を出さないで欲しい。」

僕は未だ姿も見せない背後の存在に、明確に『僕達』の答えを示し

た。

「……………そうか。ならば、今日の所はこれで引いておこう。だが、貴様らが今後もジュエルシードとやらを探すのならば、我々は再び見える事になるだろう。」

そういう残し、背後から気配が消える。

急いで振り返っても、見えたのは赤い外套を着て、同じ色の布を頭に巻いたのはと同じくらいの身長の子供が近くの家の屋根に飛び乗った所だった。

第4話 正体不明の脅迫者（後書き）

という訳で士郎と二人の邂逅でした。

ちなみに、本作品ではテストロッサ陣営でフェイトの可愛さや健気さや一途さやフェイト萌えを全面に押し出していく事に決定しました。

なのはファンの皆さん、作者がフェイトファンである事が運の尽きだと諦めて下さい。

えっ？ 最初からこの小説には何も期待していない？
それは正しい選択です。

さて、話は変わって、現在44000アクセスを頂いております。
このような駄文を読んで下さっている皆様、誠にありがとうございます。
ます。

つきましては、50000アクセスを頂けた折には、外伝を一つ書かせて頂きたいと考えております。

そこで、皆様にリクエストを取ろうと思います。

？夏だ！海だ！水着だ！！ポロリもあるの！？

？冬の雪山で遭難！こういう時は人肌で…………

？なのは達のファンクラブVS士郎 地獄の鬼ごっこ！

？アリサが誘拐された！？

？衛宮と夜の一族の相対

？どれもこれもなっちゃいねえ！俺の考えた題材で書け！

の六つの中からお選び下さい。

なお、？の場合はどのような場面を書くかの指定もお願いします。
また、細かな設定等で「こうして欲しい」というのがあれば、それも投票と一緒に書いておいて下さい。（例…「時間軸はJ S事件後で」とか「はやてをメインで士郎とイチャコラさせて！」など）

最後に、これは作者の個人的なお願いですが、

感想を下さい m () m

ダメ出しも具体的な改善点を書いて頂けるのなら甘んじて受けます。
だから、

感想を下さい。

それが作者の原動力になります。

それでは、これからも応援よろしくお願いします。

第祝話 祝！50000PV記念？！旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは？

ということで、今回の外伝は？と？の複合で、『海でフェイトとイチヤロウぜ！』となりました。

投票して下さった皆様、ご協力感謝いたします。

内訳としては、

？が二人

？が一人

？が零人

？が一人

？が一人

？が二人（内フェイトとイチヤイチャさせろが二人）

となりました。

フェイトの人氣がハンパネエ。

そして、書いている内にノッて来てしまい、出だしだけでかなり普通の投稿一回分と同じくらいになってしまいました。

よってこの外伝は何回かに分けて投稿することになると思います。

その分本編が遅くなってしまうますが、せっかくの祝い事に未来の話は無粋ということでお願いします。

ちなみに、今回の話を単語三つで表すと、

フェイト（笑）

トランク（笑）

スルー（笑）

時間軸はStrikersの後です。

第祝話 祝！50000PV記念?!旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは

「知らない天井だ。」

と呟いて、私は自分が混乱している事を悟る。

なんとか落ち着きを取り戻し、今の状況を確認する。

気が付くと、私は見知らぬ場所に居た。

……うん、まだ少し混乱しているのかもしれない。

目が覚めたら——駆動音からして——車のトランクに詰め込まれて、何処かに輸送されている途中なんてきつと夢に違いない。

そう信じて、私は再び目を閉じる。

「きつと、再びこの目を開ければ……」

いつもの様に私の部屋の天井が見えるに違いない。

そう信じて、私はゆっくりと目を開いた。

そして、見えた物は——

車のトランクの天井だった。

しかし、まだ夢である可能性を捨て切れない私は、とりあえず床に後頭部を打ち据える。

普通に痛かった。

本来なら頬を抓るのが定番だろうが、狭いトランクの中で一切の身動きが取れない程に拘束され、しかも私の体がキチンと入り切る様に関節がギチギチに固められているので、身じろぎ一つできない状態だ。

この話が始まって400字目にして、私はようやくこれが現実だと認める事にした。

メタ発言？今回はネタ回だから大丈夫だ。問題無い。

という風に現実逃避を始めた自分を無理矢理現実に戻し、私は現状に目を向ける。

JS事件が終結し、ようやく事後処理等の騒ぎも落ち着いて来た今日この頃。

そんな夏のある日の朝、私はいつも通りに起床し、朝の鍛練を一通りしてから朝食を作った。

よし、ここまではいいな。

そして優菜が起きて来たので、一緒に朝食を摂った。

うん、これも問題無い。

問題はその後だ。

朝食の済んだ私が、洗い物を済ませて出掛けようとする、背後から優菜が声をかけてきて…………

「……………思い出した。」

そう、振り向いた私に、優菜が突然催眠ガスを吹き掛けて来たのだ。

妹よ、そのガスマスクは何処から取り出した。

そこまで思い出したところで、不意に車が停止した。

目的地に着いたのか、ただの信号かはわからないが、どの道ここまで完璧に詰め込まれていれば身動きの取りようもない。

少なくとも、今朝見た優菜は贋物ではなかったので、この車を運転しているのも最低限信用の置ける人物のはずだ。

長年連れ添った妹であり、娘でもあるあの子を私が見間違えるはずはないし、あの子が私を危険に陥れる様な真似をするはずもない。

む？エンジン音が止まった。

どうやらここが目的地の様だ。

いい加減四肢が痛みや痺れを通り越して無の境地に至り始めた。

そろそろ出してもらわないと本格的にヤバイ。

密かに焦り始めていた私であった。

すると――

ガチャ

――トランクが開き、救いの天使が舞い降りた。

「シロウ!？」

「ああ、フェイトか……頼む、助けてくれ。」

その後、フェイトによって救出された私は数時間振りに動くことの出来る喜びを噛み締めた。

sideフェイト

今日は久しぶりに休暇を取って、海に行く事にした。

本当は、まだJS事件と呼ばれるようになり、あのPT事件とも大いに因縁があるあの事件に関する処理手続きが少し残っているのだが、今回の休暇は仕方ない。

なぜなら――

三日前

「おめでとうございます。一等ですね。」

事務的に告げられた事実、私はしばし呆然とする。

そうしている間にスーパーの従業員であろう女の人は説明を続ける。
マルチタスクのおかげで聞き逃す事はないので、私は落ち着いて起こった事をもう一度思い返す。

私は、日用品を買いに来たスーパーの福引きで一等を当てた。

きっちり整理して、ようやく理解し、納得し、感情になる。

一等は一泊二日のペア旅行券で、場所は観光で有名な常夏の次元世界だ。

ホテルもそこそこ良いとこで、この旅行は滞在期間（量）よりも満足感（質）を追求した物になることが予測できる。

むしろ普通のスーパーの福引きなんかで当てちゃって良かったのかと当てた自分と思うくらいだ。

ただ、仕事もまだ少し残ってる。

皆も頑張ってるし、ここで私だけ遊びに行くのも心苦しい。

まあでも、当てたからにはやっぱり行きたい。

この世界には一度だけ任務で行った事があるが、とても綺麗なところだった。

あそこにシロウと二人きりで行けるなんて考えただけで顔が熱を帯びるのを感じる。

何よりシロウもきっと喜んでくれる。

よし、行こう。

そう決めた私の行動は早かった。

スーパーの中ではやてに通信を繋ぐ。

「もしもし、はやて？」

「もしもし？フェイトちゃん？どうかしたん？」

「うん、実はさっきスーパーで買い物をしてたら福引券を貰ってそれで福引きをしたら一等のがあたってその景品が旅行が何だけどそこに行きたいから三日後から二日間休暇を貰っていいよね？」

一息で言い切った。

「え、あ、う、うん。まあ、フェイトちゃんの残りの仕事量なら多少余裕はあるし、有休も六課が出来てからまだ殆ど使って無いし、一応大丈夫やけど……………」

「そう？ならお願い。仕事も、休みまでにあらかた終わらせるから。」

「えっ？いや、あれを二日でとか無r——」

「そういう事だから、よろしくね。」

シロウに仕事が終わってもいないのに遊びに行く様なだらしの無い女だなんて思われたら、私はきつと生きていけない。

もちろん多少残していたって「いつも頑張っているんだから」って言って微笑みながら許してくれるんだろうけど、それでもシロウにだらし無いところを見せたら恥ずかしさで顔も見れなくなりそうだ。

旅行の準備の方は、海の仕事をしている関係で慣れた物だ。

それこそ一日どころか一時間あれば必要な物は大抵用意出来る。

だからこれは明後日やるとして、一先ずは仕事だ。

さあ、気合いを入れて頑張らなくっちゃ。

|

——

——

翌日―午後

「……………なあ、フェイトちゃん。」

「何？何処か間違いがあった？」

「いやいや、そうやないんよ。……ただ、これ、ホンマに二日で？」

「うん。」

私は今、親友にして上司でもあるはやてに昨日と今日の午前中を使って終わらせた仕事の成果を見せていた。

「…………ほほう。なるほど…………えみゃん絡みやろ？」

「うん。」

私は、あえて堂々と返事をする。

はやては一瞬面食らった様な顔をするが、すぐに立て直して苦笑しながら仕事の成果に目を通し始めた。

「まあ、そうやろね。うちもえみゃんとの旅行のためならこれくらいするかもしれんなあ」

やはり恋する乙女は似たような物らしい。

「じゃあ、私は明日の準備とかあるから。事前の報告通り早退するね。」

「うん、ええよ。ただ、『あの掟』のことだけは忘れたらあかんよ。」

「うん、わかってる。」

『あの掟』とは、衛宮士郎を愛する者達が従わなければならない掟の事だ。

それを破ると、恐ろしい罰が待っている。

ああ、思い出すのも悍ましい^{おぞ}。

何はともあれ、準備である。

今日はこれから必要な物を買って、明日の準備を進める。

旅行券はたまたまあのスーパーの帰りに出会ったユウナに頼んでシロウに渡して貰う事になっている。

ただ、私より早く来てほしいか後に来てほしいかと聞かれて、とりあえず私と同じくらいで良いと答えたけど、あの質問は何だったのだろうか？

ってそんなことはどうでもいいんだ。

ああ、早く明日が来ないかな？

|

と、ここまでが昨日までの私の過ごし方だ。

今はすこしだけ寝不足で疲れてるけど、ちゃんと化粧（士郎直伝）

とかでわからない様にしてあるから大丈夫なはず。

そんな風に考えながら私は次元転送施設まで車を走らせた。

side out

|

||

|||

私は少し体を動かしてから辺りを見回す。

ここは………

「次元転送施設？」

次元転送施設とは、次元世界を行き来するための、言わば空港の様な場所だ。

「う、うん。今回の旅行の行き先はミッドチルダじゃなくて、イーアワーだから。ところで、なんで私の車のトランクの中にいたの？」

「旅行？ どういう事だ？」

「えっと、ユウナから聞いてないかな？ チケットもユウナに渡したんだけど……。それで、なんで私の車のトランクの中にいたの？」

「いや、全く聞かされてない。」

とりあえず、私が詰められていた車のトランクを確認すると、大小

の紙が一对を見つけた。

恐らく私が下敷きにしてしまったからだろうが、少しくしゃくしゃになってしまっていた。

大きな紙は、優菜からの手紙だった。

少々長いので簡潔にまとめると

・三日前にフェイトが福引きで旅行券を当てたのを見た。

・それを私に渡すよう頼まれた。

・だが、私の事だから、きつと無駄に遠慮して他のフェイトの友人に譲ってしまうと考えた。

・なので、フェイトには私にどのくらいの時間に来てほしいか事前に聞いておいて、その時間に私と荷物がここに着くようにした。

・今回は同時に着いたらいいとのことだったので、私を眠らせてこっそりフェイトの車のトランクに詰めた事。

・私の荷物は車の後部席にフェイトの荷物と一緒に置いてあるとの事

・もう一枚の小さな方の紙が旅行券である事

———およそこれだけの事が一枚の紙にビッシリと綴られていた。

とりあえずはイロイロと確認しなければならない。

先ずは――

「フェイト。旅行券とはこれの事か？」

小さな紙を取り出して尋ねる。

「あ、うん。それだよ。なんだ、やっぱり持ってたんだ。そして士郎はなんで私の車のトランクの中にいたの？」

「フェイト、これを見てほしい。」

私は優菜からの手紙を渡した。

すると数分後、

「……………優菜……………」

何とも恨めしげな声を出すフェイトがいた。

「まあ、ここまで来てしまったからには仕方ない。」

少し落ち込んでいるフェイトの頭を撫でてやる。

「フェイトも普段は管理局の仕事で忙しいだろうし、今回は特に大きな事件があったんだ。少しくらい羽を伸ばしたって罰は下るまい。二日間、目一杯楽しむとしよう。」

そう言うとフェイトは幸せそうに笑って頷いた。

余談だが、その後しばらくそこでフェイトの頭を撫でていたが、昔

はあまりなかった身長差も、今でははっきりとわかるほどになっていた。

よりわかりやすく言うと、少し恥じらいながらも嬉しそうに私を見上げて来るフェイトはとても可愛らしかった。

第祝話 祝！50000PV記念?!旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは

トランク（笑）

いかがだったでしょうか？

これを書いていて思った事なんですが、

萌えが書けない

正直、最後の最後で少し「あれ？これ萌えかな？」的な物は書けた
気がしますが、中々うまく行かないものです。

そして気づいた。

フェイト視点の方が萌えは書きやすい！

てな訳で、次回も続いちゃいますので、その時こそ真の萌えを皆様に
提供できれば幸いです。

では。

第祝話 祝！50000PV記念？！旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは

更新がいつもより遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。

遅くなってしまった理由は、テストがあった事と、部活の大会が近くなってきた事です。

タグに不定期更新とある様に、これから時々このような事があるかもしれませんが、どうか暖かい目で見守って頂ければ幸いです。

第祝話 祝！50000PV記念？！旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは

「やっと終わったか。」

私達はイイアワーに到着した。

移動時間は時空転移魔法を使っているので一瞬なのだが、審査や必要書類の記入等で大分時間がかかった。

そのため、しばらく座りっぱなしで疲れてしまったのだ。

「じゃあ、先ずは予約してあるホテルに荷物をおいて、それから海に行こうか。」

フェイトが提案する。

「ああ。それがいいだろうな。」

ちょうど空いているタクシーがあったので、それに乗ってホテルへ向かう。

「流石は常夏の世界ーイイアワー、長袖では暑いな。」

タクシーの中はクーラーもあるのでそうでもないが、外は猛暑という言葉がピッタリな程の熱気だ。

私は優菜に拉致された時のままの服装なので、長袖をの黒いシャツを来ている。

「そうだね。夏物の服を来てる私でも暑いくらいだもん。シロウは大変だね。」

そういつて苦笑いを浮かべるフェイトの服装は清楚な白いノースリーブのワンピースだ。

ところどころにフリルの刺繍が施されていて、大人しめでありながら地味ではない。

清廉な感じがフェイトの雰囲気ともマッチして、傍から見れば私達は深窓の令嬢とその従者の様に見える事だろう。

「シロウ？どうしたの？」

「ああ、すまない。君のその服が良く似合っていて、少々見とれていた。」

そう答えると、フェイトが顔を真っ赤にしてワタワタし始めた。

「や、あの、その、に、似合ってる？本当に？嘘じゃないよね？」

「本当だとも。まあ、フェイトは可愛いから何を来ても似合うだろうがな。」

「か、可愛い？私、可愛いかな？」

「ああ。可愛いぞ。」

「…………えへへ。そっかあ。可愛いかあ……………えへへ。」

フェイトはにへらと笑いながら何かを呟いている。

フェイトが何も反応しなくなったので、私は到着するまでの間タクシーの運転手とトランクについて暑く語り合った。

――

――

――

ホテルに着くと、荷物は部屋に置いておいてくれると言うので、必要な荷物だけを持って、私達は近くの海に来ていた。

先に水着とパーカーという面白みのない格好に着替えた私は、パラソルを立てていた。

しかし、パラソルを立て終わってもフェイトが来ない。

迷っているのかと思って探しに行くと、フェイトが二人組の男達に絡まれているのが見えた。

私は脚部に強化を施し、フェイトの元へ駆け寄る。

「いいからちょっとこいつつってんだろ!？」

「痛い目見ねえとわかんねえのか!」

状況は大分悪くなっている様だ。

フェイトも休暇中とは言え、管理局員であるという立場上一般人に

強引な態度を取ることが出来ないのだろう。

嫌がりながらもあまり強く言えないでいる。

だが、いつまでも頷かないフェイトに腹を立てた二人組の片割れが、拳を振り上げた。

「女性に暴力を奮うとは感心しないな。」

その腕を掴んで振り上げる。

「アデデデデデ！」

男は情けない声を上げる。

「シロウ！」

「なんだ、てめえ！？」

私に気付いたもう一人の男が殴り掛かってくる。

私は身をかわして相手の足を引っ掛ける。

すると、男は面白い様に転んで、砂に顔を埋める。

起き上がろうとする男に向けて、私は振り上げていた男を突き倒した。

二人は重なり合う様に倒れ込んで――

チュ…………

——不吉な音を響かせた。

「うわあああああああ……!」

「ぎゃあああああああ……!」

……………嫌な瞬間を目撃してしまった。

不幸中の幸いというか、私の後ろに隠れていたフェイトにはあの穢らわしい場面を見せずにすんだ。

「てめえ何すんだよ!」

「俺のファーストキスがあああああ!」

一人が言い掛かりをつけて来る。

……………というか、あれ程軟派な事をしているにも関わらず、もう一人の男はファーストキスなのか。

私は悪くないはずだが、何故か罪悪感を感じる。

「何、と言われても、私はただ私の連れが襲われそうになったのを助けただけだが?」

「うるせええええ！」

「ファーストキスうううううう！」

男が逆上して再び殴り掛かって来る。

私よりもう一人の男の方が五月蠅いと思うのだが。

「…………ふっ！」

今度は柔術の応用で投げ飛ばす。

下は砂だし、大した怪我にはならないだろう。

「ぐっ…………く、くそう。覚えてやがれ！」

「キス……………！」

そんな捨て台詞と共に男達は去って行った。

「やれやれ。大丈夫か？ フェイト。」

「う、うん。…………むしろあの人の方が心配かも」

「そうか、無事でよかった。では、行くでしょう。」

置いてきた荷物が心配だ。

「あっ、シロウ！」

「どうした？」

フェイトに呼び止められる。

「ありがとう。さっき助けに来てくれた時のシロウ、格好良かったよ。」

この常夏の世界に似つかわしい、ヒマワリのような顔で笑った。

その笑顔に、私は不覚にもしばし見惚れてしまった。

――

――

――

「と、ところで、シロウ。」

パラソルに戻った私に、フェイトが話し掛ける。

どこかそわそわしている様な気がするのは私の気の性では無いだろう。

「どうした？」

「あの、これ、似合うかな？」

これ、とは聞くまでも無いだろう。

フェイトの水着を観察する。

フェイトが着ている水着は、シックな黒のビキニだ。

ただ、その水着は何と言うか、敢えてソフトな言い方をすれば、布が少ない。

率直に言えば、エロい。

今まではあまり意識せずに歩いて来たのだが、上も下も、何かの拍子に取れてしまいそうなほど面積が少ない。

そして何より、そのバストサイズだ。

フェイトは、聞くところによれば、私が海鳴に於いて親しくしていた四人の中で最もバストが成長しているという。

そんなフェイトの肢体を一度意識してしまうと、視線を外すことが出来なくなってしまった。

「あ、あの、シロウ？」

フェイトの呼びかけで、ようやく我に帰る。

「あ、ああ。とても似合っていると思うぞ。」

「そ、そうかな？」

「ああ。良く似合っている。私が保証しよう。」

「本当に？ありがとうございます！」

私の答えを聞いて安心したのか、嬉しそうに声を弾ませるフェイト。

「じゃあ、シロウ。ちょっと、お願いがあるんだけど………」

「なんだ？私にできる事なら何でも言ってくれ。」

「う、うん、それじゃあ………」

再び何かを決意する様に溜める。

「日焼け止めを塗って欲しいなあ、なんて。」

そして、JS事件以来最大の危機が訪れた。

第祝話 祝！50000PV記念？！旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは

ちなみに、前回書き忘れたのですが、今回の話で登場したイイアワ
ーですが、これは実在する観光地を逆さから読んで創った物です。
わかるかな？

（ヒント…日本ではありません）

今回は正直萌えやネタに力を注ぎ過ぎて文章がいつも以上に稚拙に
なっている気がします。

だがネタ回なので気にしないで下さい。

ご意見、ご感想、アドバイス等をお待ちしております。

では。

第祝話 祝！50000PV記念？！旅行だ！海に行こう！今回のヒロインは

ほぼ三週間という最早短めの更新停滞とも呼べるレヴェルの期間をお待たせしてしまい、誠に申し訳ございません。

理由については、一身上の都合としか言えませんが、この作品を楽しみにして下さっている皆様には本当にご迷惑をおかけします。

しかも今回は文章の構成もグダグダで不快に思われる方もいらっしゃるかもしれません。

どうか御容赦下さい。

第祝話 祝！50000PV記念?!旅行だ！海に行こう！今回のヒロインはっ

覚悟は出来た。

後は何も考えずにただ行動に移すだけだ。

私を頼ったフェイトの決意に報いるためにも、これを失敗する事は出来ない。

「い、行くぞ。」

「うん、来て…………。」

目の前に広がるは純白の大地。

染みも傷もそれを穢す存在は許されない。

私は有りったけの勇氣と、多大なる混乱を以ってその清廉なる聖域に手を伸ばす。

「ひゃ!?!ちべたっ!?!」

「わ、悪い!」

落ち着け。

この程度の事はこれまでの人生の中で幾度となく経験してきたはずだ。

冬木で先程の様な失敗を犯せばガンドや影や斬撃が飛んできただろう。

相手がフェイトだった事に感謝しつつ、心を落ち着ける。

「すまない。少し動揺していたようだ。だが、もう大丈夫だ。今の私に死角はない。」

「う、うん………お願いします。」

何故か敬語のフェイト。

だが、今はそんなことよりも目の前の難関にのみ集中すべきだ。

——意識を切り替える。

今私の前に横たわっているのは一つ芸術品だ。

そして私はその手入れをする執事。

執事が、女性の裸体とはいえ、一級の芸術品を前に恥ずかしがって手入れを行えないなどありえない。

そう考えると先程までの動揺が嘘の様に引いて行く。

それと同時に集中力が格段と上昇し、視覚以外の五感は意識の外に追いやられる。

「では、再び行くぞ。」

今度は日焼け止めをじっくり手に馴染ませる。

それを雪原の様なフェイトの背中に伸ばしてゆく。

「あ……んう………」

ムラが無いよう丁寧に広げていく。

「…………ひゃ…………ああ……………」

時には優しく撫でる様に

「…………やっ…………ん………」

時には激しく摩る様に

「ふぁ…………あん……………」

一通り終わったら鷹の目を以って確認作業を行う。

どこか塗れてない箇所があったり、ムラがあったりすればこのシミ一つない美麗なる肌に汚れを残す事となる。

それだけはなんとしても避けたい。

「………………よし。大丈夫だな。」

我ながら完璧な仕事だ。

「フェイト、終わっ……………どうした?」

フェイトの呼吸は荒く、顔はよく見えないが耳が真っ赤に染まっている事から、顔も同様に朱がさしている事が想像できる。

「大丈夫か？随分と調子が悪そうだが。」

パラソルの下に居るので日射病ではないだろうが、夏の暑さを舐めてはいけない。

日本では幾人もの人々が暑さの為に命を落としているのだから。

「らいじょうぶらよ、ヒーロー」

「何が大丈夫なものか。呂律も録に回ってないというのに。」

フェイトの額に自分の額を押し当てて熱を計る。

「――――」

「む、やはり少し熱が有る様な――」

「ほほ、ほ、ほほ、ほ、ホントに大丈夫だから――！！！」

その叫び声とともにフェイトは海の中へと駆け出して行ってしまった。

まあ、あれだけ走れば問題無いとは思うが、

「一応、注意だけはしておくか。」

――

――
――
フェイトが海に潜って行っても、私はパラソルの下で座っていた。

誰かが荷物の番をするべきだし、フェイトもきつとこのために私を連れてきたのだろう。

それに、何より――

「ねえ、シロウ。」

不意にフェイトから声をかけられた。

「ん？ どうした？ フェイト。」

何か問題でも有ったのだろうか？

「シロウ、座ってるだけじゃなくて一緒に遊ぼうよ。」

ああ、私を気遣って誘いに来てくれたのか。

「誘ってくれるのは有り難いが、誰かが荷物の番をする必要があるだろう？ 観光地とは言え、ここに日本やミッドチルダ程の治安は期待できないのだから。」

「じゃあ、向こうにロッカーが有ったから、そこに預ければいいんじゃないの？」

「それもそうなんだが――」

さて、言うべきか言わざるべきか……………。

「フェイトはいつも真面目に頑張っているのだから、旅行の間くらい人に面倒を押し付けて遊んだって誰も文句を言わないだろう。だから、私の事は気にせず楽しんで来るといい。」

「でも……………」

やはり渋るか……………

仕方ない、本当の理由を話すでしょう。

「それに、私が泳がないのには理由がある。」

「理由？」

フェイトはコテン、と擬音が聞こえてきそうな具合に、小さく首を傾げた。

「これだ。」

私はパーカーの前を開く。

「あ……………」

そこには、私が正義の味方であった証とも言える無数の傷痕が有る。

「ここには小さな子供も大勢いる。その子供達にこのような代物を見せる訳にもかないだろう？」

競泳用の水着やウェットスーツが有れば話は変わって来るが、生憎今はその様な物は持ち合わせていない。

優奈が荷物に入れてくれたのは、今履いている鞆の隠しポケットに入っていたトランクス型の水着と、鞆のど真ん中でその存在をアピールしていたブーメラン型の水着の二種類だけだ。

「……………」

「残念ながら私は泳げないが、フェイト一人でも楽しんでほしい。」

私がそう言うと、フェイトは無言で海に向かって行った。

「……………少し言い過ぎてしまったか。」

せつかくの旅行なのに、フェイトには嫌な思いをさせてしまったかもしれない。

私が後悔の念に苛まれたその時、私の視界の端にあるものが写った。

「あれは……………」

そうだ。

あれならフェイトと一緒に海を楽しめるだろう。

第祝話 祝！50000PV記念？！旅行だ！海に行こう！今回のヒロインはつ

ということで日焼け止めからの一緒に遊…べないという回でした。
今回は少しラッキースケベ等が入る予定です。

これを書いている内にどんどんStrikersでやりたい事が思
い付きます。

しかしA'sでやりたいことは一向に考えつかないというorz
この場をお借りしてぶっちゃけますと、最悪読者の皆様がA'sを
ご存知であることを前提にA'sの最初からクライマックスまでぶ
っ飛ばす可能性があります。

事前にご了承下さい。

その分Strikersでは士郎の立場を独特な設定にしたり、現
在計画中の『魔王様魔神化・運命の忠犬・はやてさんはまだ未定計
画』の成果を発揮したりして楽しんで頂くつもりです。

お楽しみに

ではは～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019x/>

魔法少女リリカルなのはSword

2011年12月31日20時48分発行